12月





















いけばな 桑原専慶流 2013年 12月号 No.606

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





冷たい風

仙溪

ぱいに咲いて目を楽しませてくれてい 中庭の山茶花がいつのまにか枝いっ

寒い季節がやってきた。父が亡く

頭をよぎる。けれども、去年は二度訪 た。東北の冬は長く厳しい。 れた東北も、今年は一度も行かなかっ なって一年。振り返ると多くのことが

の気持ちに優しく寄り添ってくれる。 年はまた仲間と行ってきたい。花は人 できることを幸せに思う。できれば来 毎日お風呂に入れて、温かな食事が

たりして私たちは生きてきた。そんな る。漁をしたり、ものを作ったり売っ 素朴な営みができなくなってしまった 人が増えている。 畑を耕し、収穫して暮らしの糧を得

影響も大きい。世界各地の紛争も絶え じている。人の欲が生んだ金融危機の くられ、都市も地方もその現状に甘ん た。日本には54もの原発があり、ほと んどが都会から遠く離れたところにつ 原発事故はあるはずのないことだっ

あのつらさ痛さを想像して、自分にで けて、自分で考えることをしないと、 ている気がする。しっかり足を地に着 れに、知らぬ間に押し流されようとし ことすら気づけない。 おかしなところへ連れて行かれている 温かな部屋にいても、冷たい風の、 個人ではどうしようもない大きな流

きることをしていきたい。



漆器の鉢にいける

<表紙の花> 櫻子

花材・梅擬(黐の木科) たりして使っているが、水仙や椿との た感じになる。作例の大鉢は果物を盛っ 塗りの器に花をいけると、あらたまっ

溜塗大鉢

水仙(彼岸花科) 寒菊(菊科)

赤い釉薬の花器

<2頁の花>

花材 月桃の実 (生姜科)たものだ。 どうしても赤い器にいけたい時がある。 するととても高価なものになる。でも この器は無理を言ってつくってもらっ だ。金を使うこともあるそうで、そう 焼き物の赤色は出しにくい色だそう

薔薇二色(薔薇科)

花器 赤色釉陶花器

白と黒の器

<3頁の花>

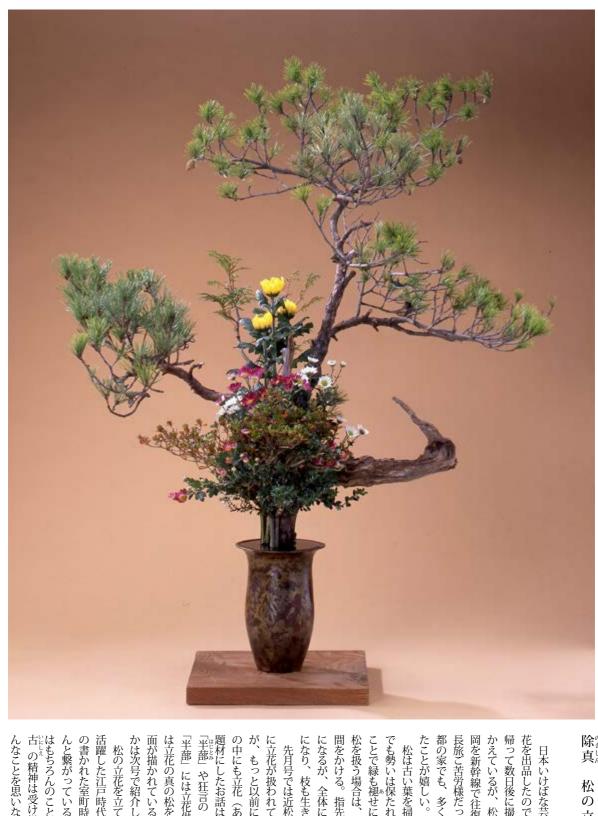
粋な感じがする。 なる。作例の木瓜と椿を備前焼にいけ が、どれもモダンな感じのいけばなに たら素朴な印象になるが、この器だと 家には白と黒の花器がいくつかある

3

花器 陶花器 (竹内真三郎作)

花材 木瓜 (薔薇科)

白椿 (椿科)



除eb 真ん 松の立花

仙溪

都の家でも、多くの人に見てもらえ 岡を新幹線で往復したことになる。 かえているが、松や躑躅は京都と福 帰って数日後に撮影した。一部いけ 花を出品したので、会期終了後持ち 長旅ご苦労様だったが、福岡でも京 日本いけばな芸術九州展に松の立

間をかける。指先が松ヤニで真っ黒 になり、枝も生きてくる。 松を扱う場合は、古い葉の掃除に時 になるが、全体に引き締まった印象 ことで緑も褪せにくい。特に立花で でも勢いは保たれる。時々霧を吹く 松は古い葉を掃除すれば、付け枝

かは次号で紹介してみたい。 面が描かれている。どのような内容 は立花の真の松を探しに出かける場 題材にしたお話はすでにある。能の の中にも立花(あるいは立て花)を が、もっと以前に書かれた能や狂言 「半蔀」には立花供養が、「真奪」に 「半蔀」や狂言の「真奪」がそれで、 に立花が扱われているのを紹介した 先月号では近松門左衛門の浄瑠璃

んなことを思いながらいけている。 古の精神は受け継がれている。そ はもちろんのこと、盛花・投入にも の書かれた室町時代と今とが、ちゃ んと繋がっていると感じる。古典花 活躍した江戸時代前期や、能・狂言 松の立花を立てていると、流祖の

逆勝手左流枝





花器 天女模様銅花瓶花型 行型 逆勝手左流枝

見越・・・檜正眞・・・・菊

流枝・・・晒木

前置・・・柘植(花展では松)控枝・胴・・・躑躅

請 (やや後方)

を参考に掲載しておきます。で、花展出品作の斜め横からの写真で、花展出品作の斜め横からの写真



レモンちゃん

食卓の窓側にはガラス花瓶に残り花を短くいけている。ガラス器がその水を飲みに来て、そのままがその水を飲みに来て、そのままがをの水を飲みに来て、そのままりを眺めている。日射しに白い毛外を眺めている。



桑原専慶流関東支部いけばな展西洋館に秋を彩る



















ウェ ル カム V けば な

心地よい空間

か。と問われたら何と答えますか。 あなたは何のために花をいけるの 「自分の美の世界をいけばなで表

つき、豊かな気持ちになれる」 れて輝いてくれるのが好き」 人それぞれに色んな思いがある。 また、「今日はお客様がこられる ただ花をいけるということにも、 「とにかく花をいけると心がおち 「いけた花が新たな命をふきこま

> から、 わってくるし、なによりもその部屋 からご主人のもてなしの気持ちが伝 やはり嬉しい。大切にいけられた花 う。訪れたお宅に花がいけてあると 気持ちで花をいけることもあるだろ おこうかしら」というような素朴な にいるのが心地よい。 花屋さんで花を買っていけて

ルデコ調の大きな明かり窓からさす の姿で壺にいけられてあった。アー てきたコブシの大きな枝がそのまま その時通された居間に、庭から切っ 族のお宅にお邪魔したことがある。 ディーに大きな風景式庭園を持つ貴 以前、フランス北部のノルマン

> 光と、 く印象に残っている。 無数のコブシの白い花が強

られたような気持ちにさせてくれ の一つだと思うのだ。 いることで、その場に心地よく迎え の言い方をすれば、花がいけられて とても居心地のいい空間になる。別 花がいけてあることで、その場が それこそいけばなの大きな魅力

せていただいた。従来のいけばな展 る花として。 ではなく、あくまでも来館者を迎え がいつもボランティアで花を飾って 4回目になる。横浜の佐藤慶真先生 こられたご縁で、2日間の花会をさ る西洋館を花で飾る催しは、今回で 関東支部の皆さんと横浜山手にあ

た。設計者はアメリカ人で立教学 どをつとめた明治政府の外交官内 谷の南平台に明治43年に建てられ 田定槌氏の邸宅で、もとは東京渋 ク総領事やトルコ特命全権大使な の家」と呼ばれる洋館。ニューヨー 今回お世話になったのは「外交官

> もガーディナーの設計だ。 ナー。京都の長楽館(旧村井別邸) 家として活躍した J.M. ガーディ 校の教師として来日、その後建築

山手イタリア山庭園に移築復元し 化財に指定されている。 氏の孫からこの館の寄贈を受け、 般公開した。同年、国の重要文 平成9年に横浜市は、内田定槌

に京都の龍村織物でつくってもら 使われていたのと同じものを特別 現されていることだ。聞くところ によるとカーテン一つとっても、 でなく、室内の家具や調度類も再 驚かされるのは丁寧な復元だけ









を体験できるように、との熱い思 だ。まさに当時の外交官の暮らし うほどの念の入れようだったそう いがこもっている。

間をのちのちまで残すために、 のだから当然だ。美意識の高い空 らこそ、家具には「手を触れない 気の良い日には太陽側の窓に、さ いる。無料で一般公開されている でください」という札が置かれて 特別な思いのこもった館内だか 天

> 気分になる。貴重な建物を鑑賞す 交官の家に招かれた客人」という いと」という緊張感よりも、「外

らげるということもされている。 下ろして廻り、強い日射しをやわ りげなく白いロールスクリーンを 大事な建物だから、気をつけな そんな館内に花が飾ってあると

という温かな気持ちを感じる空間 「ようこそいらっしゃいました!」 る、というような距離感ではなく、

に変わる。



しながら器や敷物を考え、花をいけ 割り振って、それぞれの空間を意識 館内の花の場所を事前に出品者に

> 館者を意識しながらいけられた花 なはいけられていった。 にしたり。そのようにして、「よう 360 度どの方向からも見られるよう 囲気に合うものを現場で選んだり、 は、どの花も部屋に調和していた。 てもらった。独りよがりでなく、来 数種類の敷物を持ってこられて、雰 こそ」の気持ちがこめられたいけば

はいろいろあっていいと思う。でも、 最初に書いたが、花をいける思い

> りでは、人と人も心地よい関係にな 地よくしてくれる。そんな花のまわ な」が必要とされていると強く感じ れる気がする。 体が気持ちよく感じてくれるように る。花と花の空間を意識して、花自 今の世の中に「ウェルカムないけば いけられたいけばなは、見る人も心

ルカムいけばなを! 暮らしの中に、社会の中に、ウェ 皆で心地よい空間をつくろう!

















ワタノキ

るいけばなになっている。 えた。薔薇の赤色が、パフィオの赤 ルで互いに補い合っている。ただ、 外な組み合わせだが、どちらも面白 みと相乗効果を発揮して暖かみのあ 緑がないので赤いスプレーバラを加 みがあり、質感もフワフワとツルツ ムと綿の木を取り合わせてみた。意 濃いワイン色のパフィオペディル

花材綿の木(葵科)たった今も元気である。 スプレー薔薇(バラ科) パフィオペディルム(蘭科)

花器 舟形陶水盤

9



寒桜 花型 草型 副流し <10頁の花> 仙溪

花器 胴花瓶

呼んでいるのは子福桜ではないかと だった。ちなみにいけばなで寒桜と の太さもあり、足元がほぼ真っ直ぐ 枝で、枝の締まりもいい。ある程度比較的ねばりがあり、撓めやすい 今年の寒桜は良い枝に恵まれた。

の稽古に欠かせない。(薔薇科) 寒桜は晩秋から初冬の枯淡な生花

万年青 る。生産者の技量がいけばな文化を バランス良く組み合わせて出荷され が新春を言祝ぐ。産地で葉の大小を 花器 陶水盤 花型 十五葉二果 正月花の作例。常緑の葉と赤い実 <11頁の花> 仙溪







サンバとポインセチア 出合い花(3) 櫻子

品種改良が続けてこられた。 しいオリジナルの菊で「ひょうごサ ンバマム」という。2006年から サンバとは兵庫県で開発された新

私が選んだのはウエディング・サン バ。白の一文字菊といっても良いと で、踊る花びらということらしい。 サンバのように華やかな洋種の菊

やプリティ・サンバなどの色違いが ビューだ。他にもオータム・サンバ 京都の花屋さんには今年初デ

るのは難しいと思う。 目立つ。特別扱いの花だが、糸菊や 嵯峨菊のように日本的な菊と合わせ で、アナスタシアと同じようによく ネットをかけて売られているの

毎年ニューフェイスがお目見えす ポインセチアも園芸品種としては

意外にいい感じ。新鮮な花型。 の対比と色の対比がはっきりして、 どちらが主でも従でもなく、花の形 ク調のガラス器に短く並べてみた。 あれこれ悩んだ末に、アンティー クリスマスの粉雪が舞う中で咲く

花材 菊「ウエディング・サンバ」

花器 ガラスコンポート ポインセチア(燈台草科)

いけばな 桑原専慶流 2014年 12月号 No.618

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





出合い花(15)

<表紙の花> 仙溪

アマリリス

レックス・ベゴニア

て父がたいそう褒めてくれた。 の鞍で器を固定したのだが、苦労の甲斐あっ ゴニアをいけた最初だった。手作りの真鍮製 中に、ガラスの酒杯をのせていけたのが、ベ 以前、インドから持ち帰った牛の置物の背

ある。 面が銀色に光り、私の手のひら程の大きさが はカンカンという名前がついていた。葉の表 ニアだったが、この赤いアマリリスの相手に 牛にいけたのはアイアンクロスというベゴ

もの。この小作にも様々な物語が詰まってい スからの改良品種。アマリリスは中南米原産。 ベトナムにかけて分布するベゴニア・レック 赤と黒のガラス花器は北ドイツで父が買った アイアンクロスもカンカンも、インドから

花材 アマリリス (彼岸花科) レックス・ベゴニア

花器 赤黒ガラス花器 「カンカン」(秋海棠科)

寒桜(子福桜)

<2頁の花> 仙溪

桜、子福桜など、年に二度咲くのはなぜだろう。 なぜ冬に咲く桜があるのだろう。十月桜、冬 一説には日本の桜の先祖とされるヒマラヤ

ヒマラヤザクラの咲くネパールは緯度的に



てもおかしくない。 の中に故郷を懐かしんで秋に咲くものがあっ 月をかけて東へ東へと来てくれたサクラ。そ な春に咲くようになったそうだ。百万年の歳 るために「休眠」することを身につけ、暖か きであったものが、日本の厳しい寒さに耐え は亜熱帯。冬の気温は東京よりも高い。秋咲

て桜はやはり特別な存在である。 花材 寒桜・子福桜 (薔薇科)

菊三種 (菊科)

陶花瓶(宮下善爾作)

白玉椿をいけて

<3頁の花> 櫻子

最初の一輪が開くのだが。 始めた。いつもなら十一月に入ってから先ず から沢山つけ始めて、十月末には一斉に咲き 時期をいつも心待ちしている。蕾も早い時期 き始めた。蔵の前の山茶花が大好きで、咲く 今年は庭の山茶花や椿が例年よりも早く咲

葉が形良く格好も良くていけやすい椿はそん たのは不思議なくらい。椿の種類は多いが、 椿の木は庭に多いのに、今まで白玉椿が無かっ 元に収まってくれる。 なに多くない。藪椿や白玉椿はさり気なく足 台切りデンファレと若松と取り合わせた。 昨年植えた白玉椿も同じ頃にひと花咲いた。

花材 若松 (松科) デンファレ(蘭科) 白玉椿(椿科)

て、草花の中でも最も高貴な感じを 花形 天仙、地仙、水仙という言葉があっ 花器 陶水盤 行型

水仙

仙溪

り晩冬の二月まで、初季、盛季、晩 もつ花といわれる。初冬十一月よ 季の三期にわけて挿法が定まってい

初季には花二、三本程度で葉組の

ででいける。袴もやや高く見せる。 中に花を低く入れ、袴も低く見せる。 花高く挿して五本程度まで。花を入 れない三枚組みも加えて七本程度ま 十二月に入って盛季となり、やや

組みの若葉を少なく入れる。 一月下旬より晩季。多少乱れの心

た花形をつくりあげる。 をあらわし、開花を多く入れ、三枚 花器の変化によって、それに適し

> 花の位置を高くいける。 から盛季へ移る中間といった花形。 十二月中旬にいけるなら、もう少し 作例は水仙五本の生花で、初季





立華時勢粧を読む

7

立花秘傳抄 四 (前号の続き)

十三ヶ條法度の事

しからず。 葉のある物を花ばかり指すこと。 同じ物を二所に指す事。但し色替わりては苦 花とその葉と添えたる間に、余の物を指す事 大輪なる花のたぐい短く指すこと。

草にて木をつつみ、木にて草をつつむ事。 たけくらべの事。(一方除て上るこずえの同じき

は苦しからず。)

枝葉の水につかるようなる事。

切枝とて十文字に見切る事。

本きれの事。

指枝とて面へ長く出る枝の事。

壁枝とて後ろへ長く出る枝葉の事。

後ろより前へまわる枝の事。

瓶の口よりさがる枝葉の事。

以上

古代十ヶ條法度の事

ぬきとをし

ふくめんの枝

主さす枝

なけきの枝

見越の枝

胴ぎりの枝

両頭の枝

いだく枝

引張枝 かさなる枝

以上古き板書に出たり

右の外三十六ヶ條伝授の法度有定名目の法度

共名付く

⑦同意にて嫌うべき枝の事

外これを略す

立花八戒

庭木みだりに所望の事

花白衣にて指事

他流の花を誹る事

主ある花形盗みて指す事

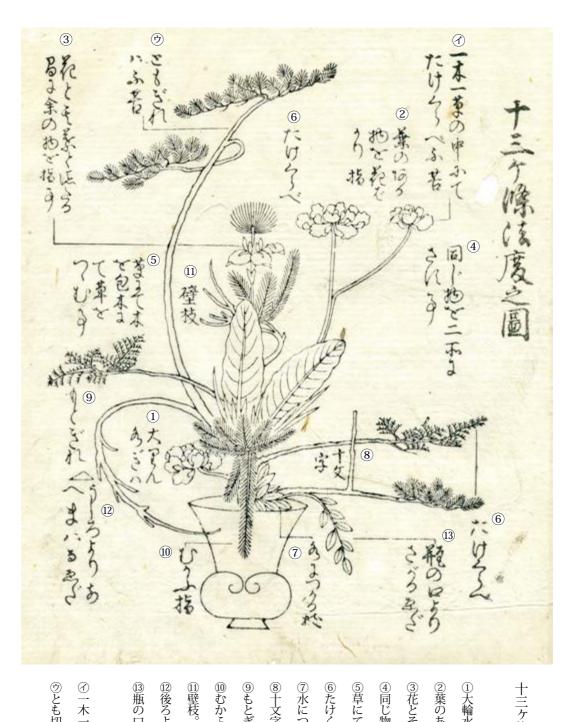
花を指すを後ろに立って見る事

花礼儀なくて見る事 人の花率爾になおす事

心花にあらざる事

(8頁へつづく)

の同気とて一地位し事



十三ケ條法度の図

①大輪水ぎわ。

②葉のある物を花ばかり指す。

③花とその葉と添えたる間に、余の物を指す事

④同じ物を二所に指す事

⑤草にて木をつつみ、木にて草をつつむ事。

⑥たけくらべ。

⑦水につかる枝。

8十文字。

⑨もとぎれ。

⑩むかふ指し。

⑫後ろより前へまわる枝。

⑬瓶の口よりさがる枝

少とも切れは苦しからず。 ⑦一木一草の中にてたけくらべ苦しからず。

立花十徳

卑しうして高位に交じる

衆人愛敬

花に他念無し

語らず友と成る

席上常に香ばし 草木の名を知る

諸悪離別 朝暮風流

精魂養性

事とせずしてつかえ仏縁あり

山下有竹体

枯木強力体

乱曲体 一らいっしき 体

右立花八戒、 十徳、 十体、 ある師家秘書を写

してこれを記す。

所々の珍しきをもって立つべきなり。 にたがい、又所によりて、まれなる草木もあれば、 目録あるといえど、花の盛り遅速ありて、時節 一応には定めがたし。とかくその時節相応の花、 五節句の花、辨びに十二月に用うべき花、

立花十体

正風体 真の花をいう

幽玄体 除真立をいう

景曲体 砂の物をいう

野沢体 草花立をいう

池中体 水草立をいう

山頭有草体

祝言に嫌うべき事

四草四木。末のとまりたる物。枯れたる枝葉。 苔晒木。名のあしき物。同釋教の名ある草木を 一草一木。一花一葉。六花六葉。四花四葉。

嫌う。

茶会の花ならば、六花六葉、四花四葉、指し

残さず指すものなり。 ば、一花一葉にても立つべし。花の数多くとも、 ても苦しからず。又貴人高位より給わる花なら

寺院の花には、釋教の名ある草、祝儀に嫌わず。

雁足などは、古来より嫌う。外これになぞらえ

て知るべし。

かき花、あかき葉、赤き実のたぐいを、いむと 火のくと云う義理をもってこれを立てる。又あ むつかしければ、ささざらんにはしかじ。 これをゆるす。火のくと云うも、水木というも、 いえども、水木ばかりは水と云える名ありとて いばらのたぐい、雑木、雑草、食物の類いなり。 わたましの花に、檜という名あしけれど、又 立花にかつて用いざる物。香りのあしき物、

婚礼の夜も色なおしとて、赤き衣服を用いる時 すというは、夫婦陰陽の義によるか。蓋し赤き 聟のかたにさし、婦のかたにては、白き花を指 は、婦の方とて、赤きを用いざるべけんや。 は陽にして末さかえ、白は陰にして不祝儀なり。 古き花書に云わく、婚礼の花には、赤き花を

釋教:釈教、釈迦の教え、仏教。 蓋し:まさしく。



シチュー鍋にいけて

櫻子

花をいけてみた。立つ様な雰囲気で青文字や枯れ紫陽立つ様な雰囲気で青文字や枯れ紫陽

青文字は枝が折れやすく、先が のは難しい。

と反省。 もっと沢山枝を買えば良かったな

ラスノ F科)ないのでない香のがリュームアップして可愛らしい。 一つの蕾の中に3~4個の花が内包一つの蕾の中に3~4個の花が内包

クスノキ科の木なので良い香りが する。切り口は山椒の香りに似てい 生姜の木ともよばれる。木肌が青い ので青文字なのだが、黒文字よりも

シチューの中味が冷めない様に、思う。思う。おりして要注意!これは青文字だとたりして要注意!これは青文字だとを買うと青っぽい木肌の楊枝であった。

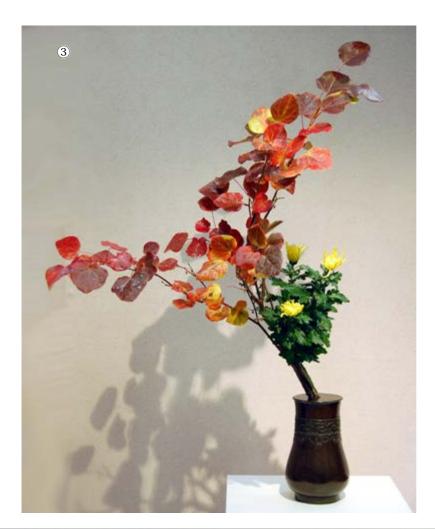
花材 青文字(楠科)

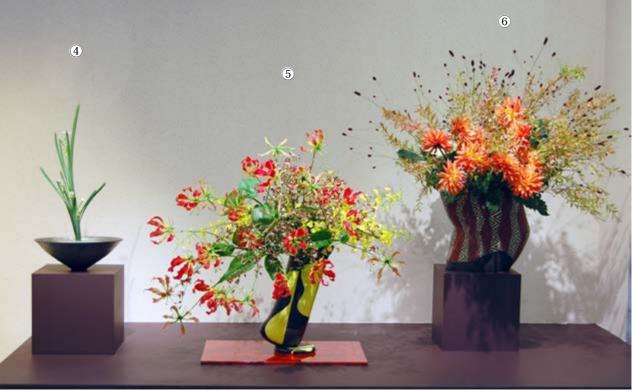
薔薇 (薔薇科)

化器 陶製シチュー鍋











草木の風興 仙溪

な文章で始まる。 名手であった池坊専応の口伝を記述 出てくる。室町時代後期、立て花の した「池坊専応口伝」は、次のよう 古い花書に「風興」という言葉が

計なり。紫のおきまへず、只さし生けたる るとはきき侍れど、それはうつく 瓶に花をさす事、いにしえよりあ しき花をのみ賞して、草木の風興

りて、都鄙のもてあそびとなれる 先祖さし初めしより一道世に広ま ざり、よろしき面かげをもととし、 る姿を居上にあらはし、花葉をか この一流は野山水辺をのづからな

ともできるだろう。」と述べている。 を思うなら、その悟りの種を得るこ 草木を見て心をのべ、春秋のあわれ 感じることができるのはまさに妙術。 なのに)僅かな時間で床にいけられ くのにも大変な手間がかかる。(それ わけでもない。庭に山を築き泉を引 夏涼しくはならず、秋に香りがする 行かねば見られないし、絵を見ても 山の勝景をあらわし、風の匂いまで た、ただ少しの水と小さな枝が、奥 この文章のあとも、「絶景もそこへ

応口伝」からおよそ百五十年後。そ 「立華時勢粧」が世に出るのは「専

> 興をもわきまえず只さし生けたるば ずして千里の外の勝景をみること、 プルな立て花は、より複雑な立花に ちがいないが、百五十年の間にシン かり」ではいけないと考えていたに とある。また、「立花八戒」の中では その術、諸芸の及ぶところにあらず。 高き峰、深き溪を小床に縮む。至ら の序文でも「ちからをもいれずして 「心花にあらざる事」を戒めている。 おそらく富春軒仙溪も、「草木の風

深いおもむき」とも言いかえられる だろうか。 趣興味」と説明されている。「味わい 大切にすべきだと書いている。 風興という言葉は漢和辞典に「風

自然に目を向け、「出生の景気」を なり、形式化してゆく中で、今一度

することと同時に、心に留めた草木 の風興をいけるようにしたい。 自然に目を向け、出生をよく理解

初冬の風興

<12頁の花> 仙溪

られる。どんな器にいけるかにもよ 過去にもよくいけている。ただ丁寧 の赤い葉。この三種のとり合わせは にいけるだけで、初冬の風興が感じ 秋の木瓜、咲き始めた水仙、寒菊

木瓜(薔薇科

寒菊(菊科) 水仙(彼岸花科)

陶花器(河井透作)

いけばな 桑原専慶流 2015年 12月号 №.630

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





季節感ととり合わせ

櫻子

器の紫色も格を高めてくれている。 そのものだ。黄色の嵯峨菊で華やぎ を加え、白椿で品良くまとめた。花 たのじゃないかと思っている。 ストとは思っていない。でも私が出 になるだろう。この組みあわせがべ のになれば、違う雰囲気のいけばな のとり合わせのどれか一つが別のも ユミ(檀)の枝。まさに季節の輝き したいと思った晩秋の色合いは出せ 色鮮やかな実がたわわについたマ 作例の3種の花材と器。 この4つ

花材 檀 (錦木科) 似合うと思う。 可愛らしさを備えた季節の花を加え たかったのだ。嵯峨菊がとてもよく だが、そこに鮮やかな黄色でしかも マユミと白椿は組みあわせの定番

椿 (椿科) 嵯峨菊園芸種(菊科)

花器 紫紅釉花器



◆横から見た、いけばなの奥行き。



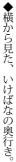
プリンセチア

気づかされる。最近はクリスマスカ並ぶと、ああ、もう12月なんだなと 白やピンクの花も作られるように ラーのポインセチアばかりでなく、 ポインセチアが花屋さんの店先に

る新品種だ。軸も長いので、鉢植え 華やかなピンクの葉が隙間なく広が めたのはプリンセチアという品種。 入れにした。 から切り取り、オンシジウムと投げ 今年とても綺麗な色だなと買い求

らいけると、良く水を吸い上げて日 たいクリスマスの花。 持ちしてくれる。暖かな場所に飾り て、切り口から白い樹液を流してか ユーホルビアの仲間なので水切りし 花材 ポインセチア (燈台草科) メキシコ原産。トウダイグサ科の

オンシジウム(蘭科)





基本花型にいける 主材 若松 (松科)

薔薇(薔薇科)

陶コンポート(字野仁松作)

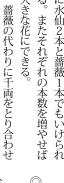
番身近な松は若松である。 れるが、生花にせよ盛花にせよ、一 正月用の松が並ぶ。色々な松が売ら 花屋には12月初旬の松市のあと、

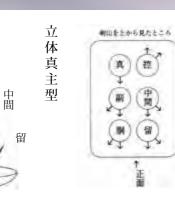
若松を主材にした正月花の作例。

られる。小さな花器なら、若松1本 さにあわせて大きくも小さくもいけ た部分で、強い生命力を感じる。 作例のとり合わせは、花器の大き 小枝の出た節から上は一年で伸び

> る。またそれぞれの本数を増やせば に水仙2本と薔薇1本でもいけられ 大きな花にできる。

てもよい。







◆横から見た、いけばなの奥行き。



◎剣山の主要部分の説明

ようになる。 合、位置と方向は、およそ左の図の それぞれの役枝を剣山に挿す場

ランスを考えて長さを決めているが、花器が小さめの ① 小枝つきの若松を真の位置に立てる。花器とのバ 場合は若松の主枝と脇枝を上下に切り分けていけても



胴と留の位置に深紅の薔薇を加える。薔薇はい

3 ける前に充分に水揚げをしておくこと。薔薇が小さ めの場合は、バランスを考えて本数を増やす。



真よりも副を少し短くした。窮屈な小枝は切ってお ② 真の左前に副の若松を立てる。真主型なので、 ては上下に分けていけてもよい。 いて最後に加える。副についても花器の大きさによっ



が広がりすぎないように。緑色の細針金で括って整え ④ 中間の位置に水仙を2本入れたところ。水仙の葉 てもよい。長すぎる場合は切っていける。 控に水仙を加え、松の小枝で水際をつくる。(4頁



えて切る。 した長さの15~2倍を目安にして、水の中の深さを加それぞれの長さ。主材の長さは、花器の幅と高さを足





立華時勢粧を読む ®

立花秘傳抄 五

立花名目 並びに 訓解(つづき)

べし。

前置の事

前置は一瓶の内、これより前へ長く出る物な と故、前置と名付く。前は先という心なり。古 き故、前置と名付く。前は先という心なり。古 き故、前置と名付く。前は先という心なり。古

るべし。
おの類前置にならず。このほかなぞらえて知れらの類前置にならず。このほかなぞらえて知い。
皆前置なり。著莪、水仙、わくら、かなめ、こ皆前置になる物、出生ひくくして横へ生える物

と云えり。おぼつかなし。蓮花、芦、蒲、鶏頭、七つの枝という時は、枝なき物は前置にならずずと云えり。その道理いかにと尋ぬるに、立花ずと云えり、その道理いかにと尋ぬるに、立花

なりと云わば、車を横におさんとするの類なるの枝に用ゆ。もしまた茎と葉と分かれたるを枝水仙、これ皆枝なき物といえど、古来より七つ

前置に古来より説々あり。一つには木末横へふりたりとも、前へ長く出たる物、前置になると云えり。一説には長く出ざれども、正面にある物を前置と見るべしと云えり。さにはあらず。前へ長く左右へかたよらざるは真の前置なり。引っ込みかたよりて長く出るは行の前置なり。引っ込みで正面に立るは草の前置なり。この理をよくわきまえて花を見物する時は、その惑いあるべからず。

る物。柔らかなる物ならばかたき物。草の心に胴あざやかなる物ならば、前置はこまやかな

は前置かるく、木の心には前置おもく。ぎぼうしは陰陽をつかいわけ、笹は剣先をわきへふらせ、高き所の花ならば前置の先低くかたむかせ、対の花には同じ物を用いず。松、おもと、小しだを三ケの前置と云う。相生心、二つ真、あわだを三ケの前置と云う。相生心、二つ真、あわたむ、これ皆伝授の前置なり。そのほか常の花は前置かるく、木の心には前置おもく。ぎぼうは前置かるく、木の心には前置おもく。ぎぼうは前置かるく、木の心には前置おもく。

前置は花形のかなめ、草木の根じめなり。前置は花形すわらず。たとえば人のつま立

胴作りの事

展と名付けしことは花書に云く、立花の形は 天上天下唯我独尊の御容をうつせり、といえる の手所にして、縦横左右前後の大枝を育てる所 の手がにして、縦横左右前後の大枝を育てる所 なり。されば初心巧者によらず、精魂をくだく

胴作り、祝言不祝言の立てようあり (口伝)。 脚は丸く景多きを専らとす。下手の胴には景少 物。白き物には赤き物。紫なる物にはあざやかなる 物。白き物には赤き物。紫なる物にはあざやかなる を花葉のうつりよく心得てさす時は、一瓶のす と花葉のうつりよく心得てさす時は、一瓶のす と花葉のうつりよく心得でさす時は、一瓶のす をであざやかにて見所多きなり。

控枝の事

控枝は七つの枝の外にして、真の花には出す でとを嫌うといえど、草の花形に至りては心の ことを嫌うといえど、草の花形に至りては心の ことを嫌うといえど、草の花形に至りては心の で出し、短き物を長く出し、副下控枝の間あき で出し、短き物を長く出し、副下控枝の間あき に心を付、一作珍しき景を取るべし。又控枝な といえど、草の花形に至りては心の に心を付、一作珍しき景を取るべし。又控枝な

立花腰の事

流枝、控枝の後ろを腰と名付く。心おもき物

なれば、腰を松、檜などのつよき物にてあしらなれば、腰を松、檜などのつように見えるものかならず仕残すにより花形すわらず。古人の云かならず仕残すにより花形すわらず。古人の云かならず仕残すにより花形すわらず。 花形は衣冠束帯して座するがごとく立つべしといえり。

水ぎわの事

水ぎわ夏は高く、冬は低く、草の両どめは口水ぎわ夏は高く、冬は低く、草の両どめは口があい。一方茂りたらば一方軽く、一方木ならば一方草にてとむべし。笹、小しだは少しひらめに遣い、みやまは草の方に指さず。苔は水ぎわにて見せ、晒木は見せず。竹は一節を見せる。外を略す。

水ぎわの指込は矢篠を結いたるがごとく、大小出入りなく美しく繕いたるを大きに嫌うなり。幹太きあり細きあり、出入りところどころり。幹太きあり細きあり、出入りところどころがごとく、大水ぎわの指込は矢篠を結いたるがごとく、大水でし。これ故実なり。

水ぎわに三師の流々あり。まず一流には草木水ぎわに三師の流々あり。まず一流には草木ままの枝を用い、葉はおのがはたらきにまかせ、あつく無造作なるようなれども学びがたきところあり。又ある師の流には水ぎわ軽きを好んで下草うすく、たとえば名人の生花を一種一種よせたるがごとく、景気やわらかに一花一葉に心を付て、はたらきあらずという事なし。誠に及を付て、はたらきあらずという事なし。誠に及を付て、はたらきあらずという事なし。誠に及を付て、はたらきあらずという事なし。誠に及を付て、はたらきあらずという事なし。本社を好み、である流には、しいてがたきわざなるべし。又ある流には、しいて花葉の奇麗を好み、花をならべ葉をそろえて、水ぎわ結いしめたるがごとし。十人に八九はこれを好み、巧者は大に笑う。この三流、よくよくわきまうべし。





梅 頻 擬

調高い感じというよりは、大らかで ついた実は大きくて色鮮やかだ。格 梅擬が売られていた。枝にびっしり 花屋で洋種梅擬として赤と黄色の <9頁の花> 仙溪

黄色とレンガ色のポンポン菊。撮影 色の糸菊と二輪菊、濃赤色の金盃菊、 をいろいろ選んで遊んでみた。金茶 したのは11月初旬の菊たちである。 とり合わせには梅擬と同系色の菊 花材 梅擬2種 (黐の木科) 菊5種(菊科)

◆横から見た、いけばなの奥行き。

梅花皮釉水盤(木村盛伸作)

役目を終えて

<表紙の花>

美しい花が咲き終わり、これだけ沢 ち姿のバラの実が少しだけ出回る。 エネルギーをつかうのだろう。 山の実をつけるには、株はかなりの ノイバラや鈴バラが終わる頃、立

丈は短いが、実は大粒で艶々とし

く食べるらしいが。 い。餌の少なくなった冬の頃仕方な ても種ばかりで野鳥も見向きもしな ていて美味しそう。でも実際は食べ

こへ白いアマリリスを立てると12月 は片方に寄せておき、反対側にバラ らしい雰囲気になる。 る。赤い器に、赤い実と赤い花。そ の実をかためて釣り合いをとってい グロリオーサとアンスリウムの葉

花器 花材 アマリリス (彼岸花科) 赤色釉花器 ばらりオサ (百合科) 薔薇の実「センセーショナ ルファンタジー」(薔薇科)



◆横から見た、いけばなの奥行き。



9





インターネットの写真投稿サ イト「インスタグラム」に日々 の写真を投稿中です! (www.instagram.com/ gonchansensei)



横から見たところ

を咲かせるようになったそうだ。 もしれない。 記憶が遺伝子に残っているということか 日本で秋から冬に咲く桜には、故郷の

咲くのをやめて冬の間は休眠し、 は冬の厳しい寒さに対応するため、 きであったのが、日本にやって来た頃に

秋に

マラヤ付近と考えられ、もともとは秋咲 ラヤザクラが秋に咲く。桜のルーツはヒ

ネパールの首都カトマンズでは、ヒマ

耳付銅花器 生花 留流し

をいけながら遙かネパールに思いを馳せ 咲きなので子福桜だと思う。近頃は寒桜 が寒桜の名前で出回る。写真の桜は八重 花屋には、十月桜、冬桜、子福桜などになっている。 寒桜

花型

仙溪

琳派に習う

にいけることを考え、デニム生地を ばな展」に私が出品した花だ。 飾る「琳派400年にいける・いけ バックに吊して赤と白を印象的に で、青竹を器にして紅白の実を上下 左の写真は四条通のウィンドーを 天井の高いウィンドーだったの

> 帰って写真に撮った。 ガラスに風景が写り込むので、持ち 見せる工夫をした。ウィンドーでは

大成し、酒井抱一へと発展した。絵 悦と俵屋宗達を祖として尾形光琳が などの装飾芸術の流派で、本阿弥光 代における絵画を主とする工芸、書 「琳派」を辞書で見ると、江戸時

> と絵を基盤とし、画面の豊かな装飾 画は技法、表現ともに伝統的なやま 性が特色。とある。

あたる。 京都鷹峯の地を拝領して四百年に 今年は本阿弥光悦が徳川家康から

「思んあみこうえつ

統の技と品格に磨きをかけて、新し 琳派の人気の秘密は何だろう。伝

習わなければと思っている。

新たな「美」をつくろうとした情熱 が心を打つのだろうか。 い着想と技法を駆使し、時代が望む

代をつくる情熱こそ、この節目に見 に生かすことも意義深いことと思う けれど、試行錯誤しながら新たな時 「琳派」の技法やデザインを現代

花材 数椿(椿科) ないでは、一般の木科) ないでは、一般の木(の木) 南京櫨(燈台草科)

陰陽五行

関わりを見直すヒントがあるんじゃ ことではない。ただ、一人の華道家 ないかと思うのだ。 として植物のことをより深く知りた いという思いとともに、人と自然の のは、なにも陰陽師になろうなんて 私が陰陽五行に興味をもっている

思う人が多いだろう。まず陰と陽に 離れた古くさい迷信のような考えに の考え方を見てみよう。 あるのだろう。中国古代哲学として ついて、それぞれどのような定義が 陰陽思想と聞くとなんとなくかけ

となった。 すなわち「陰」の気が下降して「地」 となり、次に重く濁った暗黒の気、 つまり「陽」の気がまず上昇して「天」 中から光明に満ちた軽い澄んだ気、 る状態であったが、この「混沌」の 原初、宇宙は天地未分化の混沌た

書かれているが、同じ内容が「日本 書紀」の冒頭にも引用されている。 (紀元前一四〇年)の「天文訓」に この陰陽の二気は、元来が混沌と このことは中国の古典、『淮南子』

が陰陽思想の要だと思う。(つづく) いう一気から生まれたというところ



出逢い花 (25)

仙溪

無 患 子 (無患子科)

供が病気を患わないようにとの願い れるトンボにみたてた羽根には、子 おいたので見ていただけると思う。 がわかる。作例の左下の実を切って の果皮の内側で、ころころと動くの がたわわについている。実には黒く た。病気を運んでくる蚊を食べてく 正月の羽根つきの羽根の重しにされ て丸い種が一つ入っていて、半透明 黒い種は堅くてよく跳ねるので、 無患子の枝をいただいた。丸い実

遊ぶ子供達を見守るお母さん。 る。艶やかさと瑞々しい生命力を感 と珠が飛び出しているように見え を挿すと、朱色の宝袋からぽんぽん き立つ器として、漆器を選んだ。枝 じさせてくれる薮椿は、飛び跳ねて この貴重な無患子の枝が品良く引

◆横から見た、いけばなの奥行き。



いけばな 桑原専慶流 2016年 12月号 No.642

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





アロエ「不夜城」

<表紙の花> 仙溪

枯紫陽花(紫陽花科) アマリリス(彼岸花科) 花材 アロエ・不夜城(百合科)

陶花瓶(宇野仁松作)

キダチアロエはかつて「医者いらキダチアロエはかつて「医者いらないな利用法を知っている人も少なそんな利用法を知っている人も少なくなってきた。

作例のアロエは茎がぐにゃりと曲作のアロエは茎がぐにゃりと曲で、ここ一番という時に、その価値で、ここ一番という時に、その価値がっていたのでその動きを生かしがっていたのでの動きを生かしがっていたのでの動きを出

大輪深紅のアマリリスで温かみと大輪深紅のアマリリスで温かみと、大輪深紅の大変程になってくれ際花が両者のつなぎ役になってくれ際でる宇野仁松作の花瓶を選んだ。感じる宇野仁松作の花瓶を選んだ。

「本のと。



桐と梅擬と寒菊

<2頁の花>

仙溪

梅擬(黐の木科)花材 桐(桐科)

· 工彩曲艺器 (字野二公寒菊 (菊科)

ざっくりとした季節りなく。 花器 紅彩釉花器 (宇野仁松作)

大きな口の器にたっぷりの水を入れ、あまり背が高くならないように、れ、あまり背が高くならないように、れ、あまり背が高くならないように、奥行きのある花型に二種の枝を留め奥行きのある花型に二種の枝を留め東荷を選び、黄色い蕾と赤い実を引き立てた。

黄金の舟形花器

<3頁の花> 櫻子

花器 金彩舟形花器 この舟形の器は両親がニューヨークで買ってきたもので、「花ふたりクで買ってきたもので、「花ふたりが施された煌びやかな器だ。軽い器が施された煌びやかな器だ。軽い器があって重たい花材は似合わない。白いネリネと槍鶏頭、赤い縁取りのドラセナを膨らみのある扇型にいけてみた。

器を普段から見つけておきたい。ンにいけたくなる。そんな時の為の12月は赤と白の組み合わせをモダ



スターリンジア

櫻子

花材 スターリンジア(フトモモ科) ガーベラ2色 (菊科)

花器 赤色ガラス鉢

この白い小さな玉はスターリンジアといい、オーストラリア原産のファといい、オーストラリア原産のフトモモ科の植物だ。フトモモ科といえばユーカリが思い浮かぶが、他にえばユーカリが思い浮かぶが、他にたれにグアバ、フェイジョアといった果樹などもフトモモ科の植物と覚た果樹などもフトモモ科の植物と覚えておきたい。

スターリンジアは赤や青に染められたドライフラワーのこともあるれたドライフラワーのこともあるが、生の切り枝ははじめていけた。が、生の切り枝ははじめていけた。が、生の切り枝ははじめていけたので、鉢から土ごとは鉢を見つけたので、鉢から土ごとはずしてビニールで包み、そのまま花ずしてビニールで包み、そのまま花まに染み込ませて、長く飾っておけた。

横から見た奥行き



立花秘傳抄

常磐木之部(つづき)

晒ゃれれ

非祝言。上中下。

(口伝)。

梅擬(ほそき晒を用いる)、柏(同上)、梅 晒木を用いる木八つあり。楓、 柳松 檜 $\widehat{\Box}$

伝)、円栢。

そ晒木に生を付けんと思わば、必ずまず出生を しき物は、かならず木ずえ晒木となるなり。凡ぱい 晒木は高山の大木、しかもその性かたく齢人

一つの習いなり。

見立て、それぞれに能く相応したるを専一とす。

用うべきなり。 なれば、白くよく晒て景気異曲にするどなるを 楓なで 松 檜 円槓、 右の四木は高山出生の物

するどなるはうつらず。枝ほそくすなおなるを 梅擬、 柏はさのみ高山の物ならねば、 白く晒

> 用うべき。此のさかいよくよく工夫なして立つ べきものなり。

ば、やわらかに朽ちたるごとくなるをよしとす いに枝くるいたるはうつらず。朽木の柳といえ 柳は幽谷岸上に生える物なるゆえ、白くきれ

付てやわらかなるは景気よくうつる物なり。是 梅のしゃれは太きを嫌ず。ところどころ苔の

ども、立て様にてくるしからず。 晒木は古法に水際にて見する事を嫌うといえ

苔

納。日本私記、 非祝言。上中下。多識に云う、百蕊草、艾 ひ幕に ひたけ 和名、日影草(木の

堀川百首

苔未詳)

よこね島下葉におふるさかり苔露かからね

ばかわくまもなし

新千冬

り天のかぐ山 みどりなる苔のむす木も白妙の雪ふりにけ

のとまりたる物、枯れたる枝、この言葉顕然な のむすまでと読めるはあれども、木に付たる苔 えり。大に笑うべし。さざれ石の巌となりて苔 法の言葉にいう、祝言の花に嫌うべき物、すえ 用いず。自然と葉の付きたる木に苔の付たるは ざる道理必然なり。 真立の花に苔を用いざることを、是祝言にあら を祝儀に読める証歌ありや覚束なし。されば極 り。和名に日陰草とあれば目出度き物なりと云 に、苔の付たるを祝言とはいいがたし。立花制 用うべきか。枯れて葉もなく朽ちて枝もなき木 古来祝言の花に苔を遣うといえど今様に是を

る魚、死したる鳥、そのかたちながらも奉ると たとえば貴人高位の御祝に饗膳を奉るに干した うて苦しからざる、口伝あり。ある師の云う、 苔木祝言にあらずといえど、松の一色には遣

円栢=伊吹 (柏槙、真柏)。

いえど、御祝いの大本にひかれて不祝儀とは云いがたし。松の一色もかくのごとし。松は祝言いがたし。松の一色もかくのごとし。松は祝言な一の物、その上余木をまじえず立てる時はこれ極々の祝儀なる故、苔をまじえず立てる時はこれ極々の祝儀なる故、苔をまじえず立てる時はこれ極々の祝儀なる故、苔をまじえず立てる時はこいがたし。松の一色もかくのごとし。といえど、御祝いの大本にひかれて不祝儀とは云いると、

時はさのみ嫌うべきにあらず。
時はさのみ嫌うべきにあらず。
時はさのみ嫌うべきにあらず。
時はさのみ嫌うべきにあらず。
時はさのみ嫌うべきにあらず。
時はさのみ嫌うべきにあらず。

養って我が子と見るように育てる心をもって指苔晒木を遣うに習いあり。たとえば人の子を

本、その生所万里へだつといえど瓶上に立て合木、その生所万里へだつといえど瓶上に立て合 立花の妙にあらずや。初心巧者によらずこのさ 立花の妙にあらずや。初心巧者によらずこのさ かいをよくよく工夫して上手になるべし。花道 かいをよくよく工夫して上手になるべし。花道

おきたい。
では、生きた木に自然に苔がついているもでは、大いのは良いが、枯木の苔は相応しくない。極真立にも苔木のは良いが、枯木の苔は相応しくない。極真立にも苔木のは良いが、枯木の苔は相応しくない。極真立にも苔木のは良いが、枯木の苔は相応しくない。

この後、苔木晒木の解説はまだ続くが、「立花時勢粧・中」の景色をつくる。そんなところに花道の楽しさがあるとも述べている。

なっている。梅の苔と松の晒が花形の要になっている。

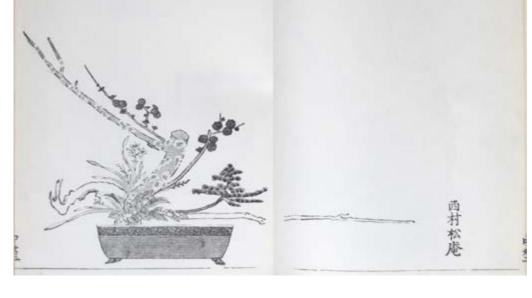
より一株砂物の図を紹介しておく。初版では冨春軒作と

(大日本華道界刊 思文閣出版刊) (日本華道社刊) (日本華道社刊) (日本華道社刊) (日本華道社刊)

(思文閣出版刊) 立華時勢粧

1、朱沙河 百寸公室、70页~1997年 第七十七図

梅 苔 松 晒 水仙 椿 著莪 嫩一株砂物 西村松庵(初版では冨春軒)



華道フェスティバル あいち2016 第1回国民文化祭・

役員招待出品 桑原仙溪 (公財) 日本いけばな芸術協会・ センス(竜舌蘭科)サンスベリア・アルボレッサンスベリア・アルボレッ 名古屋市民ギャラリー栄 アンスリウムの枯葉 アンスリウム(里芋科) アロエ・不夜城(百合科)

まった。私にとって貴重な出逢い。 (写真(1)2)

陶大壺 (近藤豊作)

が、近藤豊さんのどっしりした器が 先が尖っているので扱いに難儀した しっかりと受け止めてくれた。 屋での花展に出品した。どちらも葉 今号の表紙と裏表紙の花材を名古 会期中「琳派400年、花遊びの





立花時勢粧の水仙一色立花

水仙(彼岸花科) 水仙一色立花 行の草 寒菊(菊科)

撮影 水沢圭介 銅立花瓶

る。狩野甚之丞(永徳の甥)の作とぼんやり見える障壁画は菊であ する帳台構。(11月11日命夕刊掲載)の丸御殿「遠侍」勅使の間に隣接の丸御殿「遠侍」勅使の間に隣接立てた水仙の立花。背景は二条城二 の時代 二条城にいける」のために 京都新聞に一年間連載される「華

だなと感じた。 出ているのか想像しながらだった うちの一つを模してみることにし が、まさに「自由」を得た人の表現 た。絵の中の葉が立体としてどこへ 粧 下」にある「水仙一色」3図の 今回の撮影にあたり、「立花時勢

かできる。その先の「自由自在」な 花を目指そう。 教わった花型にいけることはいつ



立花時勢粧より



赤芽柳

仙溪

花器 煤竹竹筒 花型 生花 草型 留流し 赤芽柳(柳科)

多少目をつむって花型の参考に掲載 当たる側と裏側とでは枝の色が違 しておく。 作例は枝の捌きに乱れが残るが、が一体になって美しい。 う。いけ終えた時に飴色の木肌がす べてこちらをむいてくれると、全体 赤芽柳15本の生花。赤芽柳は日の

横から見た奥行き



東寺・灌頂院 を又神立像 がとしんの生花 献花

仙溪

花型 銅薄端 端 這柏槙(檜科) 生花 草型 副流し

弘法大師空海が彫ったと伝わる夜

10



ハイビャクシンを銅器にいけた。 不動明王立像(平安時代)の横に、 ただいた。私は両像の間に居られた 10名が献花のいけばな展をさせてい にあわせて、京都いけばな協会から 叉神立像(阿形と吽形)の特別公開

私ははじめて夜叉神像を拝んだ

られるので、格子の間から拝まれる 方も多いと聞く。歯痛を治して下さ 夜叉神様の全身は蜂の巣穴が開い

ずっと優しい印象。周囲のいけばな 浮かぶお顔は、想像していたより 不思議な力を与えて下さる。照明に を喜んで下さっているようだった。 て痛々しい。それでもなお見る者に

ねこちぐら

ぐらの中で丸まっていることが多 レモンちゃんは寒くなるとねこち い。お気に入りのマイホーム。 去年の冬に戴いたねこちぐら。





サンスベリア・ アルボレッセンス 仙溪

間で、硬い緑色の葉の先端が鋭く たい。花茎の枯れたものがでていた 尖っている。アルボレッセンスとは (8頁) ので合わせてご覧いただき 屋の花展で、同じ器に立てていけた た」という意味だそうだ。いわゆる 「木立サンスベリア」である。名古 「木のような」とか「木の性質をもっ この観葉植物はサンスベリアの仲 陶大壺 (近藤豊作) サンスベリア・アルボレッ センス(竜舌蘭科) アンスリウム(里芋科)



いけばな 桑原専慶流 2017年 12月号 No.654

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





横から見た奥行き

カンガルーポー <2頁の花>

櫻子

花材 カンガルーポー2種 (ハエモドルム科)

薔薇(薔薇科)

花器 陶製鍋 (林聡江作)

6つに裂けていて、細い毛に覆わ れた筒状の花を咲かせるが、カンガ ルーの前足(ポー)に確かに似てい 見れば見るほど不思議な花。先が

えないが。 も混ぜてみた。土鍋にいけて暖かな 紫と多彩だ。今回はピンクシルバー 色だけではなく、赤、黒、オレンジ、 用にしていたからという。花色は黄 くで見た事がないので、なんともい るような気がする。カンガルーを近 トラリアの人達が、赤い地下茎を食 贈り物」という意味。昔からオース ム科だが、ハエモドルムとは「血の オーストラリア原産のハエモドル





横から見た奥行き

汽車ポッポ <3頁の花>

花材 ヒペリカム (弟切草科)

アルストロメリア (アルストロメリア科)

ダリア(菊科)

花器 陶製機関車

けた。シュッポシュッポと、童心に 持をこめて焼き物の機関車に花をい なった。お友達を相手に先日はじめ そして、その『花遊び』を通じて、 の興味が深まってきたようだ。 ての稽古をしていたが、いけばなへ 文に書いている。 健ちゃんも21才に たかったのである。」と父が本の序 いけばなに深い関心を持ってもらい わば『花遊び』のスケッチである。 孫の健一郎の会話から生まれた、い ホチャンとケンチャン』は、素子と 子供のためにいける花。そんな気 「長らく流誌に続けてきた『ホッ

れている。

房の一つ、マッカム窯で作られたも

この花器である。デルフト陶器の工

のは、現在ロイヤルマッカムと呼ば

ロイヤルマッカム <表紙の花> 仙溪

櫻子

花材 躑躅(躑躅科) 水仙(彼岸花科) 小菊(菊科)

陶花器

牧場の柵に縄で括りつけていたのは えた花のよう」と父が書いているが、 ンダ編で、「野道のお地蔵さんに供 仙齋&素子の「花ふたり旅」オラ (ロイヤルマッカム窯)

が、和室の雰囲気にも程良く調和し 1572年創業だそうだ。 付けがなされた歴史を持つからかも しれない。マッカム窯の歴史は古く、 てくれる。日本の伊万里を真似て絵 時々、稽古場の棚に飾っている

しく受け止めてくれた。初冬の仄か な緊張感が心地よい。 はじめて和花をいけてみたが、優



横から見た奥行き



横から見た奥行き

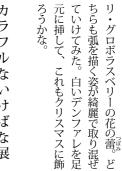
シンフォリカルポス

櫻子

を まりオクラダス (百合科) ボンフォリカルポス (忍冬科) デンファレ (蘭科)

ムラサキシキブの実かな?と思う は北アメリカ原産スイカズラ科の た。寒冷地でも暖地でも良く育つの た。寒冷地でも暖地でも良く育つの だ。寒冷地でも暖地でも良く育つの だ。寒冷地でも暖地でも良く育つの だ。寒冷地でも暖地でも良く育つの だ。寒冷地でも暖地でも良く育つの だ。寒冷地でも暖地でも良く育つの だ。まか かいってきた。 白い実の改良種もあるが、ワイン レッド色は原種に近いらしい。葉が 付いていても取り去っていけた方が いい。ミリオクラダスのようなたっ なりの緑を添える事で艶やかな姿に なる。

グレーの実に似ているのはユーカ



クラフルないけばな展

花器 鹿耳ワインクーラー

小学校の音楽教師をされている鈴木慶由さんが、京都市の子供教室案 木慶由さんが、京都市の子供教室案 本慶由さんが、京都市の子供教室案 年目になる。その初めての発表会に 全面的に協力させていただいた。小さくてもカラフルでセンスの良い花さくてもカラフルでセンスの良い花 さくてもカラフルでセンスの良い花 さくてもカラフルでセンスの良い花 はに残ることと思う。



レモン師匠

姿勢もいいような。 ていたら、いつの間にか特等席に座って、 緒に話を聞いていました。いつになく 稽古中に集まってお軸の絵の説明をし 床の間を拝見するレモン師匠。





平年の歴史上伝統が残る方都・京都に 連絡と受け継がも交往、芸術 先人なの表と「伝統を与り、 未来へつなり起いを持つ。 の都を全する自然などのは、公園が り間、非道条部を被送網が元の 今間、非道条部を被送網が元の 今間、非道条部を被送網が元の らり、ま述条部を が送りたいして何った。 桑原櫻子 ※回申奏送問 花との対話を楽しむ心の豊かさ。 花を通して四季を感じ いけばなの魅力は

た家、にすることです。その上でお 起しになる人のことを思い、季節の 起しになる人のことを思い、季節の 起しになる人のことを思い、季節の とれいに咲き続けます。そういう心 されいに咲き続けます。そういう心 されいに咲き続けます。そういう心

傷む前に早く気付いて直し、。生き

表写書を提出、「は記録をの百円 株代園、なおの多本うとわれた 多度高齢制度を出して300 本度にも関する。本行さる上ので 大戸を見ける。本行さる上の様で 大戸を見ける。本行さる上の様で 大戸が見げる。本行さる上の様で 大戸が見げる。本行さる上の様で 大い行の高器が成った場合。 大部によりを が描いまる。 大部によりない。表別の上別の曲け あの代がたが、表別の上別の曲け たがむまる。

ぶオフィス街の一角とは思えないは

られていたが、時代とともに、いけられていたが、時代とともに、いけばなのあり方も変わってきている。 社会の雑念を忘れ、無心で花と向き 合いたい人やいけばなに関心を持つ 済外の人も増えている。 昔は花嫁修業の一つに奪道が挙げ

「日本の伝統文化は日本人にしい





元のことが紹介されました。(車の広告企画連載として) 京都新聞10月21日出朝刊・京の彩時記「道を究める」に櫻子副家

立華時勢粧を読む **40**

立花秘傳抄

実之部(うづき)

藜 蘆 と

となし。花道第一の秘伝の物なり。 老母草は前置ばかりに用いて、外に遣うこ 祝言。葱苒、葱炎、老母草(藻塩に有り)。

同広葉のたぐい。著莪、水仙、くまざさ。 おもとに指し合わせぬ物。草木の実のたぐい。

常のことなり。又六枚八枚十枚、調に遣うても 苦しからず。口伝。 葉数七枚九枚、もしくは十一枚、半に遣う。

時は、葉組しまりたるは幽玄ならず。ゆるやか 株と云う。葉つかいその外、秘伝あり。師範な くては立つべからず。凡そその姿ばかりを云う おもとの実一つを一株立てという。二つを一

> うつさんや。 らず。そのさかいに至りては、輪扁か輪たる の人ならば、出生玄妙の所、瓶上にいかでか べし。たとえまた伝受したりとも、執行未熟 なる時は、くだけて勢いなし。緩からず急な

> > ※前号の訂正=(7頁)燈籠草

立花 柳除真 おもと前置

柳梅 富春軒 柘植 苔 嫩 檜 万年青



かしき事なり。 これをさす。道おろそかにするのいたり、なげ 代は茶会の花ともいわず、相伝なき人も妄りに あまねく見する、これ古法なり。誠に花道を重 げて花台の上におき、花形ばかりを残して、扨 亭主より外、見することなし。その後前置をあ ゆるさず。花立てしまい水打ちて、あるいは客 にあらざれば指さず。立てる所へ人の来る事を におよびて立てるといえど、座席をえらび、床 んじ、そのつたえの大切なることこの如し。近 ある師の云う。古代はおもとの前置、懇望度々

通用物之部 附目録

除まぶき 黄漬が梅い 小てまり 竹 きじの尾 つる水木 磐梨し 米柳 庭桜 小しだ 笹 えびついばら 種紫き 小米花 粉団花 牡丹

がんそく

白丁花はくちょうげ 薔薇び 磐檜葉

ひとつ葉

なり。常に山木に生え混じりて、野に生えざる 草のごとくして冬枯れせざるは山吹、庭桜の類 る水木、連翹のたぐいも又同じ。その茎、木に 草につるの部に入り、歌事に草の部に入る)。つ 用いるものなり。 珍しき草木出たりとも、右の理をもって立花に なり。竹まず通用の第一なり。藤これに次ぐ。(本 は小羊歯、一つ葉のたぐいなり。たとい末代に して木にあらざるは南天、牡丹のたぐいなり。茎、 通用物とは出生木にあらず、草にあらざる物

ざるを第一とす。十三ケ条法度に云う。草にて 宝の物なり。 り、草と草との中に立てれば草となる。これ重 徳たること、木と木との間に立てる時は木とな 木を包み、木にて草をつつむと。然るに通用の 木は木につづき、草は草につづきて、縁の切れ 立花の上には木を山と見なし、草を野と詠め、

> もと前置」と名がついた第八十七図である。 もう1つは「立花時勢粧・下・秘曲の図」の中の「お つあり、そのうち2つは桜一色の前置になっている。 青について書かれている。万年青のある立花図は3 「実の部」の最後は花道第一の秘伝のもの、万年

ところにも同じようなことが書かれていて、桜や万 と。著莪、水仙、熊笹もだめと書かれているが、こ 年青を扱う時の心構えとして知っておきたい。 れらは万年青に対する敬意の表れである。桜一色の 万年青には実の類、広葉の類を一緒に使わないこ

その命の大本のように万年青が水際に座っている。 そんな印象の立花である。 える。落ちついた風格の中にも命の鼓動を感じる。 枝をつくり、正真とあしらいに紅い若葉と檜葉が見 第八十七図では枝垂柳、紅白の梅、柘植で主な役

年青が使われるのはもう少し後になる。老母草もな るほどと思う名前だ。 ここでは藜蘆の字が使われているが、中国名の万

さて花材解説は次に「通用物の部」に入る。 「立花の上には木を山と見なし、草を野と詠め

使える重宝なものとしている。 ある時は木になり、ある時は草となって、どちらにも 景色にも使うことができる花材が「通用物」であり、 景色をつくるようにするのだが、山の景色にも、野の を第一とす」とあるように、木と草によって山と野の 「木は木につづき、草は草につづきて、縁の切れざる



ヒムロスギ

仙溪

花材 姫樟科 (神科) が (神和) (神和) が (神

花器 陶花器 (前田安徳作)

では姫榁杉あるいは檜榁杉。
の園芸品種で自然分布はない。漢字がついているが正しい名前で覚えてがきたい。スギと名がつくがサワラおきたい。スギと名がつくがサワラおきたい。スギと名がつくがサワラカシーズンに出回るヒムクリスマスシーズンに出回るヒム

灰色がかった葉のふわふわした優しい手触りが気に入っている。相手はアマリリスやガーベラなどのはっきりとした色と形の花がいい。そして赤い敷物。見つけた時に是非とも手に入れておきたい。



横から見た奥行き



横から見た奥行き

赤い実と紅葉の立花 仙溪

花材 雪柳 (薔薇科) 梅擬 (薔薇科) 歩きを (薔薇科) 大苺 (薔薇科)

花器 陶花器 二輪菊2種 (菊科) 糸菊2種(菊科)

園芸種の梅擬は枝が短くて実が大

立てて一週間たったところで撮影







仙溪

真

花型 生花・株分け 花型 生花 株分け でかんぽ本 小菊(菊科)

花器 三島陶鉢

絵の画題で「歳寒三友」とは、松・竹・梅、もしくは梅・水仙・竹である。どれも冬の寒さに耐える植物で、節操を曲げない士人の精神を象徴する意味がこめられている。士人とは高い教養と徳を備えた人のこと。水仙は凛とした姿にいけたい。5本のうち花は真・胴・留に低く入れている。





横から見た奥行き

ロウヤガキ

仙溪

スプレー菊(菊科)
菊「色自慢」(菊科)

花器 陶花瓶

ロウヤガキの立派な枝が売られていたので、菊と投入にしてみた。これでも小振りな枝を選んだのだが、れでも小振りな枝を選んだのだが、れがある。長く垂れる枝を上の方がある。長く垂れる枝を上の方がら出すために仕掛けを工夫していた。こ

いけばな 桑原専慶流 2018年 12月号 No.666

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





異国の雰囲気

<表紙の花>

櫻子

をいた。 ・ 黒色カラー(里芋科) ・ 本苺(薔薇科) ・ はある(薔薇科)

花器 真鍮銀象嵌深鉢

器だ。両親の思い出と共に大切な器 模様がいい。手間を掛けて作られた 議な異国の雰囲気がする。銀象嵌の の一つだ。 を合わせてみたがよく似合う。不思 ふたり旅」の中のエジプト編で使っ ている。今回黒いカラーと赤い薔薇 この真鍮の器は両親が写真集「花

フエゴという名の菊

<2頁の花> 仙溪

寒桜(薔薇科) 菊 (菊科)

赤と黄色のコンビネーションが見事 この大輪菊の名前は「フエゴ」。 花器 陶コンポート 小菊 (菊科)







横から見た奥行き

い合い引き立て合ってくれた。のいい寒桜を合わせると、互いに補

横から見た奥行き

メラレウカ

<3頁の花> 櫻子

花材 メラレウカ (フトモモ科) 磯菊 (菊科) 磯菊 (菊科)

この器も「花ふたり旅」のもの。オランダ編で登場するデルフト花瓶オランダ編で登場するデルフト花瓶だ。旅先で器と花を調達し、風景の中に置いて撮影する。大変なエネルギーが必要だが両親はそんな旅を4度繰り返して本にした。お蔭で花器の選択肢が増えたので、こんないけばなも生まれる。



山茱萸の実

仙溪

花型 草型 副流し 花型 草型 副流し

この山茱萸は名古屋の生徒さんが切ってきて下さった枝だ。大きな束切ってきて下さった枝だ。大きな束だけ付いていたのを元気そうな2枚だけにした。こんないけ方ができるのも生徒さんのお蔭だ。たわわに付いた赤い実が美しい。

横から見た奥行き



てくれています。ときどきです。ときどき生徒さんを、お出迎えしレモンだより



立華時勢粧を読む

(52)

立花秘傳抄 三

草之部(うづき)

葦し

と云う。
と云う。成長したるを葦という。花を蓬薦るを云う、成長したるを葦という。蘆は未だ秀でざるを云う。 蘆は木だ秀でざるを云う。

難波にはあしというなるひむろ草代々の古歌

ためしにかかる葉もなし

世は出生直なる物なれど、除心に用いる時はふとき針がねを通してたむるなり。請、副には大ように葉の茂りたる物、又みきくるいたる物など取り合いよし。心の出し所、著莪、 僧扇の陰よりやわらかに出したる景気面白



けてよし。
芦の心は風をもちたる景色あらば、瓶にのせざるもおかし。葉長くしおれたらば断ちつせざるもおかし。

芦は出生しげき物なれば、二本三本を以て心とす。上より遣いくだしては流枝にも用いる。或る人の云わく、芦は流枝までは下げ用る。或る人の云わく、芦は流枝までは下げ用

古歌

のみちひにたよりまちける

くしほるるなり。 だて巻き、さいさい水をかけざれば、はや がなり。その上を

蒲ホ

祝言。上中。

黄粉を蒲黄と名づけ、又蒲槌という。香蒲と云い、笋を蒲弱と名づく。花の上の

和名、花かつみ。

古歌

人に恋やわたらん

杜若

柘植



蒲は先に勢いなきにより流枝に用いず。

むねを以て、しごく時は自由に靡くなり。うように使うべし。なびきあしき時は小刀の葉遣い薄に同じ。茎に付きたる葉を以て思

つくも

非祝言。上より中まで。

針金を入れて遣うべし。本草綱目、三稜。丸すげ。大藺ともいえり。本草綱目、三稜。

葦、蒲、つくもと水辺の植物が続く。

章は6作で使われ、その内4作は葦の真である。 でている。葦と松が片方へ長く伸び広がるのを、太でている。葦と松が片方へ長く伸び広がるのを、太の晒木とぐいっと曲がった太い松でバランスをとっている。もはやどれが請でどれが流枝といったことのはなく、自由で絶妙な調和がある。

蒲は2作で使われている。第5図は蒲の真。蒲の 葉が上方で伸び広がっているので、他の役所は変化 葉が上方で伸び広がっているので、他の役所は変化

を採取して立てたものと思われる。では真っ直ぐな印象のつくもだが、自然に曲がったものでは真っ直ぐな印象のつくもだが、自然に曲がったもの第36図は二株砂物でつくも(太藺)の真である。現在

※参考文献

『花道古書集成 第一期第二巻』 立華時勢粧

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧

著莪 嫩 電春軒 太藺 芍薬 松 晒木 杜若 小菊 太藺 芍薬 松 晒木 杜若 小菊





万年青 九葉一果

花材 万年青(百合科)花型 行型

正月花の参考に。葉のふちに白い斑の入る都城と呼ばれる品種。このような大葉系のオモトは薩摩万年青が発祥の地とされるので薩摩万年青と呼ばれている。赤い実の茎には割り箸を添えて固定しフローラルテーりで巻いておく。

横から見た奥行き









横から見た奥行き(10頁の花)



とはいえ私達の手に入る水仙は素

積雪の後で捻れながら逞 しく育つ水仙。淡路島の 黒岩水仙郷にて。

の冨春軒仙溪も「立花秘傳抄」で水 葉先まで針金を通して絵図と同じ形 に形をつけたわけではないのだ。 元々自然に備わったもので、人工的 すなわち絵図の流麗な葉の動きは で出口を撓めるのみと戒めている。 仙の葉には針金を通さず、細い竹串 花本来の目指すものではない。流祖 である。ただこれは模倣であって立 にしてみたが、かなり自由奔放な姿 仙一色立花を立てた(10頁の花)。 「立花時勢粧」の絵図をもとに水

仙溪

花型

10頁 水仙 小菊 水仙一色 直真立て

著莪

11頁 水仙 寒菊

陶花器・銅花器





横から見た奥行き(11頁の花)

つか水仙郷で見たようなくせのある

金が入っていると安心なのだが、出立ててから運ぶのには葉先まで針 仙本来の姿を立てると11頁のように 直なものばかりなので、そういう水 なるがこれはこれで良さがある。

11



出逢い花 34

満天児

花器 瑠璃色結晶釉花瓶

花器の瑠璃色にドウダンツツジの (前田五雲作)

う。小さな枝でいいので、いけて飾 けて様々な種類のツバキが咲くだろ りたくなる。一種でいけるのもいい もツバキの花だ。これから春にか けで、素敵ないけばなになってくれ 瓶なのだが、2種の小枝を挿しただ この器は高さ20センチの小さな花 この出逢い花の要はなんといって

横から見た奥行き



いけばな 桑原専慶流 2019年 12月号 No.678

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





お茶りないけばなと

花材 月桃の実 (生姜科) 番薇 (薔薇科)

花器 デルフト花瓶

沖縄から来た月桃の実。夏には可愛らしいキャンディの様な実になるので、稽古花材として良く使う様になった。緑、黄、オレンジ、赤と色なった。緑、黄、オレンジ、赤と色なった。緑、黄、オレンジ、赤と色なった。緑、黄、オレンジ、赤と色なった。緑、黄、オレンジ、赤と色なった。緑、黄、オレンジ、赤と色なった。緑ではとても身近なショウガ科の植縄ではとても身近なショウガ科の植場では大方の一部として使われる。葉物で生活の一部として使われる。葉物で生活の一部として使われる。葉物で生活の一部として使われる。

ピリッとしたエキゾチックなお茶。ン。乾燥した実を5分ほど煮出して、ポリフェノールが多くノンカフェイポリフェノールが多くノンカフェイ泉体を温めてくれる。ワインよりも寒い日の夜、月桃のハーブティは





南天とピンポン菊

<2頁の花> 仙溪

花器 方形陶花瓶 (宮下善爾作) だ材 南天 (日木科)

木枯らしに身を震わせる頃、南天の赤い実を見ると、なんとなく勇気の赤い実を見ると、なんとなく勇気づけられる。寒さもへっちゃらな濃緑の葉をきりっと広げた姿は粋である。白とピンクの手鞠のような菊をあり合わせると、新鮮な感覚のいけばなになった。

ナル・ファンタジー」バラの実「センセーショ

薔薇の実(薔薇科)一巻でする一巻できる一巻

花器 ガラス花瓶(フィンランド)

バラの実「センセーショナルファが咲いた後の実を鑑賞するためにつくられた品種だそうだ。樹勢が強いので栽培しやすく、今後出荷も増えてくるだろう。長く飾ったあとドラてくるだろう。長く飾ったあとドライにしてさらに楽しめる。

ているようだ。まの足元に黄色のメラレウカを実の足元に黄色のメリアを覗かたっぷり加え、同色のダリアを覗かたっぷり加え、同色のダリアを覗かまの足元に黄色のメラレウカを



山茶花の生花

<4頁の花> 健一郎

花型 煤竹竹筒 山茶花(椿科) 生花 行型

何度も見てしまう。 増えてきた。一度意識してしまうと らっているが、年々目の合う回数が 年生の頃から家元宅に住まわしても かったが咲いてくれている。小学4 う長い付き合いだ。今年も少し遅 中庭に植わっている山茶花とはも

湯につかる事が身体にとって良くな 当に好きな時間だった。熱すぎるお ぎる湯に浸かり火照った身体を冷ま をひくことも学習したが、気がつく 冷めし風邪をひくこともあったが本 る夜空と中庭を見て過していた。湯 そうと蔵の前に腰をかけ、明るすぎ と好きな時間が無くなっていた。 いことも知り、湯冷めをしたら風邪 幼い頃は、祖父が入った後の熱す 今は日の出ている時間にみる葉の

横から見た奥行き



老爺柿(柿の木科) 薄紅色糸菊 (菊科) 臙脂色ピンポン菊(菊科)

> 花器 柿色陶壺 黄色糸菊(菊科)

えて老鴉柿と呼ばれ、やがて老爺柿種で、実が黒く熟すのを鴉になぞら に。ツクバネガキとも呼ぶ。 ロウヤガキは中国原産の渋柿の 花器

銅花瓶 老爺柿(柿の木科) 山茶花 (椿科)

老爺柿の生花

生った大きな柿の木を遠目に眺めてなな実が愛らしく、実がたわわに 怪我をしないように注意。 には先が鋭く尖った小枝があるので いるような風情がある。ロウヤガキ ロウヤガキの切り枝は高価だが小





れている立花瓶・砂鉢は9種類あ

h615)°

図②象

の花」にも使われている(テキス

立花時勢粧」の立花図に描か

る。前号につづき「耳」に注目し

てみよう。

1

「立花時勢粧」には象の意匠の

この象は鼻の形が特徴的。

この図は冨春軒による「除真の

百九図・第百十図の松一色の立花 内草の花形」である。他にも第

(どちらも富春軒作) に使われて

図

にとって特別な器の一つといえる。 **図**

図(7)

(蓮?)

第八十四図(テキスト615)

図(8)

図9

だが、それぞれに個性的な松なの ⑧⑨⑩図はどれも真が松の立花 竹

図(10)

で見比べると面白い。

と共に「草の対の花」に対で使わ

唐子

図

いる (テキスト636)。 冨春軒

テキスト No.640

テキスト No.612・633 に掲載

第二十 テキスト No.625



第五十八図 テキスト No.669



第八十三図 テキスト No615・637





第五十九図 テキスト No.674



テキスト No.613



第十二図 テキスト No.622



第四十一図 テキスト No.641

【訂正】テキスト677 8ページ

3

象

テキスト674 7ページ 第五十九図

西村松庵

- 図

第

一図

第二十四図

卒業旅行 パリ・ベネチア 健一郎

るのは彼だけだった。どうも彼は強 の学生とすれ違うが、仮装をしてい を過ごす。目的地に着くまでに大勢 をするわけでも無く予定通りの時間 あ、今日はハロウィーンか。特に何 すれ違った。アカデミア橋の上でマ 3日目の朝、ドラキュラのメイクを い心臓を持っているみたいだ。 ントをたなびかせ登校している。あ した中学生ぐらいの1人の男の子と ベネチア(英語ではベニス)での

後悔していなければいいのだが。あ 身で仮装をしている成人男性は京都 クターものの着ぐるみをきてバイク の後学校でどうなったのか聞くのを ではみかけない。気が盛り上がって たちで溢れかえっているそうだが単 で学校に行っていた。渋谷は仮装人 つ年下の弟の順之助が高校にキャラ 確か去年のハロウィーンは私の一

努力をしている。左を向くようそそ り者である。本人はその他大勢と同 うなやつだった。端的にいわば変わ 之助が小学生のころ発表会に出すた のかしてみても効果はなかった。順 じく右を向きたいらしく日々必死に るときに必死に左を注視しているよ わっている。皆んなが右を向いてい 昔からなのだが、私の弟は少し変

> ばかりである。 とを覚えた順之助は大衆漫画の模写 のを見かけるが周囲の顔色を伺うこ る。今でもたまに鉛筆で描いている の人が経験した感覚が研ぎ澄まさ はずだ。周りが見えなくなるほどに 合わせようとするとそうはならない を描いた事は無かった。周りを見て た。彼は決して先生に描かされて絵 子の絵でショックだったと言ってい かに一つだけ暗い絵がありそれが息 と、小学生らしいたくさんの色を使 モリの絵は私のお気に入りである。 めに描いた、星月夜に羽ばたくコウ 実際に発表会に足を運んだ母による 一つの事だけに集中すると今までそ キラキラした絵を描く中に明ら その個人の特徴を持つようにた

である。 たのは少数派である事実は明明白白 いつの世であっても世界を変えてき の有無を論じたいのでは無い。ただ、 埋没してしまう。オリジナリティー 芸術家は大衆の模倣をした途端に

確認のためでもあるが、抑えきれな 向き合ったときの自分の進捗状況の ているのは、何度も行き同じ作品と た。無理をしてこの歳で1人で行っ 術を体感すべくこの二都市に絞っ を見て周り、ベネチアにて現代の美 た。パリにて古典~近代までの美術 い好奇心が強く起因している。興味 ベネチアへいく前にパリに寄っ

> が変わりさえすればどんなものにも 見る全ての世界を変えるには、自分 びに日常が日常でなくなる。自分の まれ、美の感覚を研ぐ作業をするた を持つと止まってはいられない。 感性を磨くために美しいものに囲

観想に誘う。 強く惹かれた。純粋な美しさは私を 品ではなくただ純粋に美しい作品に は、賛嘆を強要するような崇高な作 随分な数の作品を見たが、私的に

いため、作品の息づかいが聞こえ 自分と作品を分け隔てる結界がな

だろう。決して周囲の顔色を伺って 情は周りまわって憎悪にもなりうる とってもそれは非常に人を惹きつけ タッチ、堂々とした趣、 作品は偏愛の中からしか生まれない の節々に愛情が感じられた。その愛 る強力な引力を持つのだがその根幹 かのような感覚だった。あれほどの のだが、裸で作品と向き合っている るようだった。生き生きとした筆の 何を一つを

釈された作品を消化しきれずにいた が、お腹は空く。適当な店でスパゲッ て回って帰路につく。百人百様に解 ベネチアビエンナーレの作品をみ

とも愛らしい。大人数の群れで行動 かいていれば嬉しく思う。 色濃く想起される。彼は無事大恥を する子供達がキラキラ輝くほどに朝 は。子供が群れで店を襲う姿はなん ツアゲするのを目の当たりにするの 達が店という店を一軒一軒丁寧にカ ない。魔女やカボチャに扮した子供 際に見たのは初めてだったかも知れ まともに食事ができそうにない。実 りを見ると、この辺り一帯のお店で さいお化け達が占拠していてよく周 ティでも食べようと店を覗くと、 にすれ違ったドラキュラの男の子が

できる代物ではなかった。



ホテルの近くの運河にて

うに張り巡らされた生活の生命線とでも言うべき運河を背 フを自分なりに咀嚼し表現したも のである。



夏櫨の立花の立花

〈9頁の花〉

健一郎

除真立花

栗(無科) ななかまど ば ら 七竈(薔薇科) 夏櫨(躑躅科)

桔梗(桔梗科)雪柳(薔薇科)

小菊(菊科)

花器 陶花器

今年はかき氷は美味しくなかった。今年はかき氷は美味しくなかった。苦しさに夜中に目を覚ますこともなく、苦しさに夜中に目を覚ますこともなく。短い短い秋の到来は年末にむけてドタバタとしていると途端に終わってしまうが、その短い時間で自然も冬に向けての準備で刻一刻と様子を変えるため、毎日の観察が楽しい。

この立花は普段のお稽古のものに比べると大ぶりな立花である。あまりにもると大ぶりな立花である。あまりにもしっかりとした夏櫨だったので落とす葉も最低限に抑えた。この荒ぶる夏櫨を七電が濃い紅葉で請けている。そしてこの役目を終えた葉は散っていく。今年は長い期間、青い葉が手に入る環境だったため例年とは違った違和感を覚える。同じ毎年ではなく毎年少しずつ違う。慣れれば慣れるほどその違いは分からなくなるのかも知れないが、毎回をその時を新鮮に味わう事は大切である。



ツルウメモドキ

仙溪

ばな作家競作展」に辻田慶敬さんが ピンクのデンファレとの二瓶飾り 出品したツルウメモドキの生花は今 で、ツルウメモドキの葉色が際立っ ていた。白リンドウを根締めにし、 い葉が茂り、3日間来場者を魅了しでも忘れられない。若い実と瑞々し 1985年8月下旬、「新進いけ

除真立花

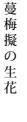
テキスト265号より

夏梅擬 (錦木科) 際躅 (躑躅科) <10頁の花> 仙溪

広口陶花器 貝塚伊吹(檜科)雪柳(薔薇科) 小菊など5種(菊科) |輪菊 (菊科)

花器





るぐる巻き付けたりしている。めたり、別の枝を支えにしたり、ぐ柔らかい蔓は途中まで互いにから



稽古で立てた立花を十日後に撮影した。緑色だったツルウメモドキのした。緑色だったツルウメモドキのたったがユキヤナギに代え、胴の糸だったがユキヤナギに代え、胴の糸がしかったがユキヤナギに代え、胴の糸がも小輪種にさしかえた。あれこれ





啓翁桜の生花

<12頁の花> 仙溪

煤竹竹筒 啓翁桜(薔薇科) 生花 草型 副流し

屋の温もりで蕾がふくらんでゆく 東北では、12月にお正月用のケイオ ケイオウザクラを生花にいけた。部 ウザクラが出荷される。 いと開花しない。冬が来るのが早い 新春に一足早い春を楽しもうと、 桜は充分に寒さを感じてからでな



レモンだより ひなたぼっこ中。



いけばな 桑原専慶流 2020年 12月号 No.690

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





クリスマス

<2頁の花> 健一郎

花材 モミの木 (松科 ブルーアイス(檜科)

磁器扁壺 手編みのツリーオーナメント

び心のあるいけばなを楽しんでい 「はなあそび」と題して菜月と遊

ときに、ものの10分程でこさえてく ナメントを、もみの木に合わせてみ た。かぎ針あみに夢中になっていた 今回は菜月の作った手編みのオー

ミの木と北欧風の人形がよく合って 素材が変わりデザイン化されたモ

> 風流な親だろう。ちょうどそれぞれ 仲蓮、季菊から名付けられたとあっ 字をそれぞれ付けるなんて、なんて の季節に生まれたのかな。 子供に、春の蘭、夏の蓮、秋の菊の たが、もし本当だとすると、自分の 国の清の時代の人物の名前、孟蘭、

ることが多い。仲の良い三兄弟のよ 生き生きと見えるようにいけると、 なんともいえない良さを感じる。 うに、互いに助け合い、それぞれも いけばなでは3種類の花材でいけ

みを補い、椿の薄紅色の花と葉で艶 花器を選び、金茶色の大輪菊で温か 和してくれた。私なりの風月三昆。 やかさを加えると、いい雰囲気に調 的な花材だが、金彩のある土っぽい ハシバミは侘びた風情のある個件

三昆(さんこん)

<表紙の花> 仙溪

花材様(樺の木科)

陶コンポート

茶道では秋に蓮根、菊、春蘭の葉株 り、蓮、菊、蘭が描かれる。また煎 あるらしい。 画題に「風月三昆」というのがあ 「三昆」とは三兄弟という意味が

椿「西王母」(椿科) 菊「フエゴダーク」(菊科)



風月三昆の軸と花。いけて十日目。

「風月三昆」を調べてみると、中



メラレウカ

<3頁の花> 櫻子

花材 メラレウカ (フトモモ科) 柏葉紫陽花の葉(紫陽花科) ガーベラ(菊科)

6、7年になる。 メラレウカをいける様になって

同じフトモモ科の樹木である。 オーストラリア原産でユーカリと

らかく包み込んでくれる。 られ出荷される様になってきた。 がして自然の恵みを感じる。 近では日本でも暖かな場所では育て 飾る場所が清潔な空間になる様な 手で葉を揉むと爽やかで清い香り 繊細な黄金色の葉がガーベラを柔 ティーツリーとも呼ばれるが、最

ように、秋を彩る身近な花材となる もらえたが、紅葉した木苺や雪柳の 今年はお稽古で何度もいけさせて





菊一色

É

<4頁の花>

健一郎

化材 糸菊(菊科) 化型 立花 菊一色 除

花器 銅薄端

園芸が発達し、自然の勢いを器に生けることが難しくなっている。花生けることが難しくなっている。花をのだ。花一輪ずつの個性が均一化されると個の魅力を引き出すのが難しい。丁寧に育てられた菊では自然の状況を想像しがたいのだ。今回は各々が伸びたいように伸びた勢いのある菊と一本づつ向き合えた時間にある菊と一本づつ向き合えた時間に感謝している。

鋼器に施された絵は一般庶民がか。今までの自分だと絶対選ばなか。今までの自分だと絶対選ばなかった器である。自然を表現する身として、人の存在を消したいというとして、人の存在を消したいというとして、人が花と在る景色を受け入れることができている。人が花と在るあたたかさが身いる。人が花と在るあたたかさが身



『魅力』 健

郎

マスクをつける事が日常になってマスクをつける事が日常になって、そんな中私は髭を伸ばしてみた。く。そんな中私は髭を伸ばしてみた。菜月の勧めである。私は中学生の頃、菜月の勧めである。中ばし始めて2、3日使っている。伸ばし始めて2、3日使っている。伸ばし始めて2、3日で鏡をみたとき自分の顔に違和感を感じた。髭については漠然と、歳を重ね90歳ぐらいになれた時に山で菜重ね90歳ぐらいになれた時に山で菜重ね90歳ぐらいになれた時に山で菜重ね90歳ぐらいである。

成り立つ行為である。

な考毛処理と言う言葉がある。無

なが毛処理と言う言葉がある。無

植物を見る行為、また見せる行為として発展してきたいけばな。花をとけるときは多すぎる葉、虫食いの生けるときは多すぎる葉、虫食いのないでを取り除く事で美しくみせる。見ていて気持ちのいい花を生けることが基本にある。

な計な毛とはいうものの、毛にも といわれている。服を着 る習慣がなかった時代は体温維持、 るぞうだ。そして現在、残っている るそうだ。そして現在、残っている るそうだ。そして現在、残っている をれらの刺激を和らげる役割があ るそうだ。そして現在、残っている。 に生 には特に大切なものを守るために生

> 鳥、人を魅了する。 の魅力となり、花びらを使って虫や、の魅力となり、花びらを使って虫や、花びらをしって虫や、花びらも、独立的な役割も持つ。髪

のまり、余計なものでは断じてない、それぞれが役割を持っている。 り、みる、みられる関係においては、 美しい、美しくないの物差し、つまく、それぞれが役割を持っている。

身だしなみと、おしゃれはどちらも、みられる場合において成り立つ。も、みられる場合において成り立つ。えるべく葉を整理するが、触れる人えるべく葉を整理するが、触れる人う事がある。没個性的な花になってしまい、その花である必要性がなくなってしまう。一枚の葉っぱ単位でなってしまう。一枚の葉っぱ単位でなってしまう。一枚の葉っぱ単位でなってしまう。一枚の葉っぱ単位でなってしまう。一枚の葉さど難しいが、色性を引き出し、より魅力的なものと性を引き出し、より魅力的なものとして存在して欲しいと考えている。して存在して欲しいと考えている。こともある。おしゃれは我慢だということだろうか。

まで、 なことである。周りへの配慮を考えることである。周りへの配慮を考えることで、ある一定の水準以上の清潔な花を生けることができる。個性潔な花を生ける事が難しいのは清を失わずに生ける事が難しいのは清

できることだ。がきることだ。

私にとって良い花とは、同じ種類であろうと各植物の個性を存分に引き出し、生命力に満ち溢れ、輝いてにとって苦手な種類の特性であってにとって苦手な種類の特性であってにとって苦手な種類の特性であっても、自分の好みに寄せず、その個性が私も、自分の好みに寄せず、その個性を移りまり魅力を引き出すことでその命が輝くのである。

理でき、スッキリとしている。ている。なんとなく自分が今までしている。なんとなく自分が今までしがループホームで人と日々向き合っがループホームで人と日々向き合っがループホームで人と日々向き合ったけでなく、

認知機能の低下が著しい利用者を担え付け、職員にとって都合の良いいでいる。各利用者の体に無理がないでいる。各利用者の体に無理がないでいる。格利用者の体に無理がないが、何をしたっていい。職員が押さば、何をしたっていい。職員が押さば、何をしたっていい。職員が押さば、何をしたっていい。職員が押さば、何をしたっていい。職員が押させている。机が持ち上がらないのなら手伝おう。机が汚れたら、消毒すら手伝おう。机が汚れたら、消毒すればいいだけだ。

ことを、自分を剥き出しにして、おき合い、本人がしたくてもできないずらをしあい、注意され、不安と向ずらをしまい。

手伝いをしている。介護のことを、できなくて可哀想だからしてあげようだなんて考えたことはない。間うだなんて考えたことはない。間違っても職員が、自己表現をしようとしている人の障害にだけはならないでいて欲しいと強く願う。頑張りいでいて欲しいと強く願う。頑張りいでいて欲しいと強く願う。頑張りいでいて欲しいと強く願う。頑張りは利用者の生きる意義を見出し、随々が生き生きとして最後まで生活的は利用者の生きる意義を見出し、できる環境を整える事ができたらなできる環境を整える事ができたらなできる環境を整える事ができたらなできる環境を整える事ができたらなと考えている。

自分の価値観を押し付けた瞬間にその人のらしさは、その人の中に逃その人のらしさは、その人の中に逃げ込んでしまい、表出しない。その人の奥にある、らしさを引き出す。これが生きるということでは無いだろうか。安心できる環境に身を置けろうか。安心できる環境に身を置けろうか。安心できる環境に身を置ける。

仕事をしている。生きしている人の目が大好きでこの生きしている人の目が大好きでこの生き生きしている人は夢中だ。生き

生であると今は考えている。生き生きと生きることが、最高の

生きる事は美しい

うもしっくりこない。鏡に映る自分一週間程、髭を伸ばしてみたがど

きれずに剃った。とれずに剃った。ないで」と騒いでいる。菜月だけは、ないで」と騒いでいる。菜月だけは、ないで」と騒いでいる。菜月だけは、が汚らしく見える。叔母からも、大が汚らしく見える。叔母からも、大

しかし、道を歩いているとどうもは丁寧に手入れされ、その人の魅力は丁寧に手入れされ、その人の魅力となり、静かにそこにいる。虫食い葉が似合う花、ちぎれた葉、奇形な花があろうとも、それが魅力とさえなれば、あるべきだ。むしろその魅なれば、あるべきだ。むしろその魅なれば、あるべきだ。むしろその魅力を取り除くことで、大きなマイナスに働くわけである。その人にとつ





赤い実 黒い種

<6頁の花>

枯向日葵(菊科)・梅擬(黐の木科)

糸菊3種(菊科)

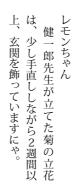
化器 陶花器

輝きだした。
かメモドキの赤い実に、黒い種をびっしりつけた大輪の枯ヒマワリをひっしりつけた大輪の枯ヒマワリをびっしりつけなると、それぞれの命がいまだ。まい種を

仙溪 レモンちゃん

てくださいにゃ。
ストーブにへばりついて離れま









初冬の盛花

<7頁の花>

寒菊(菊科) 水瓜(薔薇科) 水瓜(薔薇科) がたばな (被岸ればな)

花器 陶水盤 (清水美菜子作)

から冬まで花を咲かせるので寒木瓜ボケは春の花だが秋にも咲く。秋 少し重なる。同じく「寒」のつくカ とも呼ばれ、冬に咲く水仙と時季が 私の好きなとり合わせだ。 いかにも初冬の風情が感じられる。 ンギクとの3種でとり合わせると、

ら、スイセンにアカメヤナギとバラ る。もう少しくだけた感じにするな の組みあわせもオススメだ。 でもボケもカンギクも少々値が張

アカメヤナギの枝分かれ1本。 バラ1本。 スイセン2本。

レモンリーフ少々。

ら、皆素敵な花をいけてくれた。 でこのとり合わせで教えたが、バラ が気持ち良さそうな場所を考えなが 赤い側を自分の方へ向け、スイセン の葉を大事に広げ、アカメヤナギの 先日、中学校のいけばな体験授業





柳行李 出典:http://ei4web.yz.yamagata-u.ac.jp/ mogamigawa/life/yanagigouri.html

行_{うりゃなぎ} 椿ぱき

仙溪

花型 花材 行李柳 (柳科) 生花二種挿 草 型 副流し

花器 煤竹竹筒

椿 (椿科)

では、行李(籠の箱)に服や物を収明治時代以降、箪笥が普及するま 羅から伝わったそうだ。 納していた。行李の材料として柳が 使われたが、柳細工は2千年前に新

広まって、様々な行李がつくられ利 ギ(杞柳)で編まれた杞柳細工が産柳箱」がある。但馬国のコリヤナ ギ(行李柳)と呼ばれるようになっ 用されて、コリヤナギはコウリヤナ 奈良正倉院御物の中にも「但馬国

むかれてやっと細工の素材になる。 めに頻繁に脇芽を摘んで育て、初冬 ごもりを終えたものが、晩春に皮を いる。節のない細く長い枝にするた に刈り取り、足元に水を絶やさず冬 柳行李は現在も豊岡でつくられて 行李柳は撓めやすい。いけていて

万年青の生花

仙溪

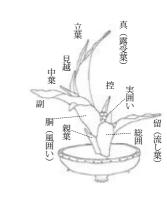
万年青(百合科)

山地の林下に生える。 常緑多年草。東海道以西の暖地の

知られる薩摩おもとの代表品種。 い覆輪のある品種で、江戸時代から 「都城(都尉)」は大型の葉に白

楽しめる。 を大切に扱い上品な姿にいける。 実の茎に添え木をしておくと長く 常緑の葉と初冬から赤く色づく実

九葉一果













壁画 に描かれたハスと瓶

仙溪

から

出現する世

宙

あったことを、前号まで見て来た。 でどのように変わっていったのだ 命力を持つ聖樹に対する信仰心が してとらえていたことや、 ではハスを生命そのものの象徴と 仏教誕生以前より、 古代インドでのハスに対 仏教が伝わる中 古代インド 強い生

た話があるが、 神の臍から生じた蓮華の上にブヒンズー教の神話でも、ビシュ がすわって宇宙を創造し 水から生まれるハ 薩がよく手にな持ち物の るの

1

2

て絵の中のハスの気になるものを 0) まず中国の西の玄関口、 ジも加わって行くこととなるのだ 形で引き継がれ、また新たなイメー イメージは仏教の経典にも様々な を重ねていたことがうかがえる。 くつか紹介してみよう。 壁画から、 何 ,中国の西の玄関口、敦煌ほか詳しいことは一旦置いておき、 かがハスから生まれるという いけばなの観点で見

がよく手に持っているの は頷ける。 修行中である菩薩が持ってい 一つに水瓶がある。において出家者の大 図①は菩薩が右手 らも水瓶 。 大 菩斯切

大乗仏教に

水を入れる容器なので、 はたして図①の花も蓋として描 することもあったようだ 入るのを防ぐために花で口に蓋を れているのだろうか。 ように見えるが、 に持った水瓶に花が挿さ 水瓶は浄ま 悪い物 (<u>N</u>2)° Ŕ 1

の器と花にどんな意味があるのだ またでよう。これの生まれ出る図像 いるのかもしれない。このガラス 循環する生命そのものを表現して 命の源としての水を壺で表現し、 ガラスの器を持つ菩薩の絵 、満瓶と呼ばれる)もあったので、 もあるが、古代インドでは生

また、花を挿したように見える (X) (3)

唐 (766~835年) ガラス碗を手に蓮を養う菩薩。 敦煌莫高窟 199 窟壁画。

中

出展: https://kknews.cc/culture/5bp4e8l.html



李麗質 (621 ~ 643) の墓の壁

大勢至菩薩立像(絹本設色)。敦煌莫高窟。(唐代)。 ペルシャ製の銀製壺のような瓶にハスが挿されている。 出展: https://kknews.cc/culture/5bp4e8l.html

唐の太宗・李世民の五女、

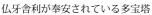
ガラス碗を手に蓮を養う菩薩。敦煌莫高窟 328 窟壁画。 盛唐 (713~765年)。

出展:https://spc.jst.go.jp/experiences/change/change_1719. html











る限り注視した。かつて水や養 ない。」藤井隆也 れた56枚の落ち葉たちは、稀有 だった。ドイツの地で私と出会 ち葉を通じて行った命との対話 分の通路であった生命活動の証 ち葉を写した。その葉脈を見れ な運命を持っていたのかもしれ い、遠く日本の鹿王院まで運ば である。それは、1枚1枚の落 「私は56枚のオーク(ナラ)の落 会期 10月30日金~11月1日出

会場 鹿王院 テキスト No.651 でもご紹介し 襖絵制作 藤井隆也 嵐電「鹿王院駅」徒歩4分

のを見せて頂いた。 来したと伝えられる仏牙舎利を奉 で、舎利殿には源実朝が宋から将 鹿王院は足利義満ゆかりの寺

た藤井氏が56面の襖絵を描かれた

安する。

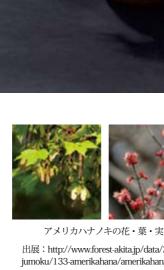
験であった。 がらにして森を感じる不思議な体 ち帰ったナラ(楢)の葉が一枚ず れの葉の命の気配があった。居な つ描かれていた。そこにはそれぞ 襖には藤井さんがドイツから持

で、是非訪れてみてほしい。 今後も襖絵は見られるそうなの

拝観カタログより)

(鹿王院令和襖絵56面落成記念







出展: http://www.forest-akita.jp/data/2017jumoku/133-amerikahana/amerikahana.html

アメリカハナノキ 銅打ち出し壺 アメリカハナノキ(楓科) ダリア(菊科) 月桃の実(生姜科)

葉よりも先に紅色の花が咲き、 別名アカカエデ、ベニカエデ。早春、 美しく紅葉する。 リカ北部~カナダに分布する落葉高 木。公園や街路に植栽されている。 ハナノキを切ってもらった。アメ 花屋さんの庭で紅葉したアメリカ

赤い実と花を合わせて銅の器にい



いけばな 桑原専慶流 2021 年 12 月号 No. 702

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





純白のクリスマス <2頁の花> 櫻子

花材 メラレウカ (フトモモ科)

(忍冬科) シンフォリカルポス

ダリア(菊科)

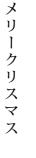
花器 ガラス花器

すごくミステリアスな言葉にな ぎる意味なのにギリシャ語では 度聞いても覚えられない名前だ 頃きれいな白い実をつける。何 物。英名はスノーベリー。秋の が、調べてみるとギリシャ語で スという名のスイカズラ科の植 えてある木はシンフォリカルポ 意味らしい。日本語では普通す 「房状になっている果実」という メラレウカとダリアの横に添

雰囲気を出してくれる。 純白の実がクリスマスらしい

引きたててくれる。 をよく割っていけると日持ちし てくれて豊かでしなやかに花を ようになったメラレウカ。足元 最近では長い期間出荷される 暖かそうなショールを巻いて





<3頁の花> 仙溪

スプレー薔薇(薔薇科)

花器 陶花器

白と深紅の花を添えると、清らりを感じたい。森の針葉樹に純 する。12月にいける花には温も がやってくると思うとウキウキ 体がこわばる。でもクリスマス かで温かな優しさが感じられる。 小雪を過ぎると風の冷たさに







初冬の二瓶飾り

<4頁の花> 健一郎

器 煤竹竹筒 水仙(彼岸花科) 水仙(彼岸花科) 水仙(彼岸花科)

結晶釉水盤(前田保則作)

より今を味わう事ができる。に生けた。枝振りも格好が良いに生けた。枝振りも格好が良いがお生花の形には線が増え、効がお生花の形には線が増え、効がお生で動ると季節の幅が限定され、で飾ると季節の幅が限定され、





十四世の生花

花器 陶花器



若松生花

仙溪

花材 花型 青竹竹筒 生花 若松(松科) 真型

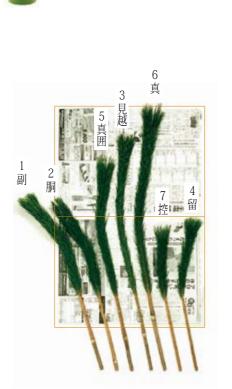
う。 頃からお正月花の稽古が続く。 稽古ができることに感謝しよ そらく花をいけるどころではな えようとしている。12月の中 いだろう。コロナ禍にあっても ソーシャルワーカーの人達はお 今年もそろそろ新しい年を迎

真

副

留

◎ 枝を選び、それぞれの長さに切り、足元の葉を取り 除き、木肌を美しく磨く。



◎それぞれ撓めて形をつける。数字はいける順番。

◎ 又木配りのかけ方

◎ 役枝を入れる順番と位置

7 6 5 4 控禁 真に 真に 留め 3 2 1 見み胴ぎ 副覧 越こ



◎ 横から見たところ

真の先は足元の真上に。

勝手を決めてからいけること。 いる場所によって右勝手、左たので、ここに掲載しておく。 たので、ここに掲載しておく。

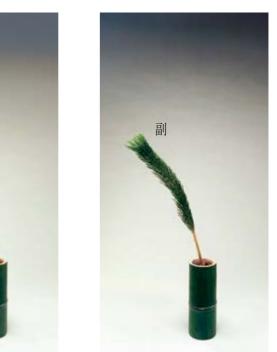
竹筒(9寸=27センチ)の3倍と新聞紙の幅がほぼ同じなので、新聞紙を広げた幅が真の水で、新聞紙を広げた幅が真の水間は真の3分の2。皆は真の副は真の3分の2。皆は真の

長さを足して切る。
これらの長さに水際から下の

諸素の中に松の緑は四季に変れることがない。このことかられ意の生花として、神への供た。慶事の花として、神への供た。慶事の花として、神への供た。とがない。このことかられることがない。このことかられる花である。

引を「ともえ結び」にする。 け、水際に紙を巻き、金銀の水に若松7本を「真の花型」にい

ようにやや少なめに水をはる。真塗りの蛤板、または白木の





胴





『言葉と自然

健一郎

くらい経った。 で人に伝えるようになって3年 で分に伝えるようになって3年

あるお弟子さんが生けた菊の花を拝見した。やや前傾に直立ている。「葉を取るのが楽しくている。「葉を取るのが楽しくている。「葉を取るのが楽しくている。「葉を取るのが楽しくれで、彼女は自分に素直だった。私の花の味わい方が拡張されたおうにも思う。葉を取ることにようにも思う。葉を取ることにようにも思う。葉を取る行為のみを考えると不快ないる行為のみを考えると不快ない。

私は主として、花の美しさと生命力を味わっているのかなと自分では思っている。個人的に自分では思っている。個人的になすぎているようにも見える。人が知っている範囲の事ならなんでも調べれば出てくる。情報を価値にすることは、自分の価値、本質を把握しておらず、自分が何をしているかわかっていないという事である。もったいないという事である。もったい

う使うかである。情報自体に価値はなく感じる。情報自体に価値はない。家元が文阿弥花伝書をイない。家元が文阿弥花伝書をイない。家元が文阿弥花伝書をイない。家元が文阿弥花伝書をイない。家元が文阿弥花伝書を

知る環境が今に比べて不便知る環境が今に比べて不便の時代の人達が真摯に花に向き合い、悩み、一つの答えとして合い、悩み、一つの答えとして記したものが花伝書であり、禁忌が多いという。言葉の響きが悪い花は特に嫌われた。紫苑が悪い花は特に嫌われた。紫苑が悪い花は特に嫌われた。紫苑が悪い花はちにされ、赤い花は引っ越しの際は火を想起するので禁花とされていたそうだ。花つつ一つに名前をつけ意味を考える。一つ一つのでと向き合っえる。一つ一つの花と向き合ったる。

「古代の呪術性のなごりともいえる禁忌の意識を取り去ったのある。それは草木花が古代とのある。それは草木花が古代とのが近世に生まれた生け花様式でが近世に生まれた生ければればない。

えている。観念的に花と向き合部分では再考の餘地があると考る部分では納得できるが、あると川瀬敏朗は述べているが、ある

い、真摯であることは立派なことであると個人的に考えている。その一方で、実践的に身體る。その一方で、実践的に身體を通じて真摯に向き合うこともた。つまり私は真摯に花に向きた。つまり私は真摯に花に向きた。つまり私は真摯に花に向きた。つまり私は真摯に花に向きた。つまり私は真摯に花に向きた。つまり私は真摯に花に向きた。つまりであると感じ、そのものうとも表ている。

ない。このジレンマにソクラテ を使用せず思考することはでき 化し、仕方なく論理で説明して はない。決まり事として、本質 たいことは決まり事そのもので 理的に解釈したもので、剝き出 ス以降の哲学者は苦しむことに 手段が言語だからである。言葉 いる。それは人に思いを伝える を人に伝えるべく仕方なく言語 とになるからだ。花伝書で伝え を定義し、観念的に解釈するこ ば、言葉にした時、それは物事 られるはずがない。なぜなら しの自然性や本質は言葉で伝え まり事を作ることは、言葉で論 室町の頃から花伝書などで決

的でもあると考えている。生花体的なものであり、また、原初葉をむしり取る楽しさは、身

とは m 今私たちが花を見てな の一つに二足歩行は木の上で始 もいろいろな説があり、その中 思っている以上に長いものかも を生ける際に枝を撓めたりする ているのかもしれない。 んだか感じる安心感とつながっ 花の中で生活していたというこ かもしれない生き物たちが木と を始めた、僕らの先祖にあたる が比較的少ない木の上での生活 まったというものがある。外敵 しれない。二足歩行の始まりに 人と枝との付き合いの長さは に作る。そんなものなんだろう。 けられる木を見つけて若い枝を タンは水平で頑丈な、身体を預 のは確かに楽しい。オランウー 曲げて巣を楽しそう

え 「物真似には似せないという位え 「物真似には似せないという位で がある。物真似を究めその物にで こうなればただ見せ場を嗜むのて こうなればただ見せ場を嗜むの みで、花が咲かないということる みで、花が咲かないということ があろうか。」 世阿弥の風姿花伝からの引用でき 世阿弥の風姿花伝からの引用で ある。似せようと思う心は頭の 中の解釈でしかない。そのさき

うか。似せないという境地は面できるのであるのではないだろに理屈でなく実踐的に本質と向に理屈でなく実踐的に本質と向中の解釈でしかない。そのさき中の解釈でしかない。そのさき

白そうだ。

言語、論理と対極にある生命そのものの広がり自然のありのままの姿。言語、論理は人間の貼して、都合よく構築した整った人工物であるから、自然そのものの本質はこぼれ落ちやすものの本質はこぼれ落ちやすに言葉と論理の力で世界を分類に言葉と論理の力で世界を分類し、名付けをする行為ともいえる。

入れることが大切である。そのためには剝き出しの自然や本性に触れている必要があり、五感の意識のありようが大り、五感の意識のありようが大り、五感の意識のありようが大り、近感の意識のありますがある。

五感の力を鍛えることはありのままの自然に反応できるための準備である。何か不思議なものを見た時に人は分かろうとするが、分かろうとしてはいけない。そのものを受け入れるのだ。言語や論理は「分かる」だが、言語や論理は「分かる」だが、方れる」のだ。文章にしていて今納得した。すごく気持ちがて今納得した。すごく気持ちが

菊の立花

〈表紙の花〉 健一郎

寒菊(菊科)小菊4種(菊科)

器 獅子耳銅立花瓶

横から見た奥行き







霧島躑躅の生花(仙溪巻りしまつつじ)

た。(1月13日~4日)(写真④⑤)和歌山城ホールに花をいけてき和歌山城ホールに花をいけてきの「いけばな芸術展」にご招待の「紀の国わかやま文化祭 2021」

頂戴した。美味しく頂きました。 でおけるでは、イチョウの黄葉を背景に季節外れのツツジの花が映えていた。 個然にもツツジは和歌山市のが映えていた。 はだそうだ。ちなみに和歌山市のが映えていた。

花 伝 書を読 む

仙溪

立華時勢粧 を読 む 63)

ここに掲載する。

立花

時

勢 粧

下

識 語

嗚呼葉しげり枝重なり景気の微 せては人を選ばず。 はあれど花影のあらたなるにまか 細なる所うつしがたき事か。 楽天は竹の描きがたきを歌に残 金岡は筆を捨て松に名づく。 ここに図する しか

辰の九月日

ものなり。

中野氏編集



『立花時勢粧 下』より

> 年月を記したもの)を抜かしていたの を紹介した時、 昨年までの5年間で「立華時勢粧 この識語(本の由来や

輝きを謳った詩は日本にも影響を与え、 (772~846) の字。 源氏物語にも多く引用されている。 金岡とは巨勢金岡のこと。平安時代 楽天とは中国唐代中期の詩人、 自然や暮らしの中の 白居易

伝承がある。 腕比べをして負かされた「筆捨松」の 前期の絵師で、 種樹郭橐駝傳」(テキスト632参照) この識語もだが、「立花時勢粧」には 熊野権現の化身と絵の

など中国、日本の古典からの引用が多

い。序文の次の箇所、

の術諸芸の及ぶところにあらず。 千里の外の勝景をみること、そ 砂鉢に西湖の風色をうつす。 されば瓶上に南山の美をつくし、 き溪を小床に縮む。至らずして からをもいれずして高き峰、 (立花時勢粧序 テキスト612参照) 深 5

い この印象的な部分にある「ちからをも れずして」はもともと紀貫之による

古今和歌集の序文に使われている。

りける。 けるもの、 む蛙の声を聞けば、生きとし生 もの聞くものにつけて、 なれば、 の中にある人、 やまと歌は、 せるなり。 万の言の葉とぞなれりける。 心に思ふことを、 花に鳴く鶯、 いづれか歌を詠まざ 人の心を種として、 事を考え 、繁きもの 水に住 言ひ出 見る 世

はせ、 猛き武士の心をも慰むるは歌なな 目に見えぬ鬼神をもあはれと思 力をも入れずして天地を動かし、 男女の中をもやはらげ、

(古今和歌集仮名序の前半部)

古今和歌集も立花時勢粧も、 晴らしさを語っている。 の輝きを伝える術として歌や立花の素 した「文阿弥花伝書」の序文も、 前回紹介 自然

なのだと教えてくれている。 「季節の輝きを表現する」ことが原点

「文阿弥花伝書」の 謎

前

回序文を紹介したが、「文阿弥花伝

手で足利将軍に仕えた同朋衆の一人。 書

1,

巻末の年号と日付の謎

文阿弥は室町時代の「たて花」の名

(鹿王院蔵)」には謎めいた所がある。

り。

天承元年 五月十三

な日とされた。 は竹が酔っているので植え替えに最 節花の事」として「五月十三日 竹」と ことを指していると思われる。この日 ある。これは中国の俗説「竹酔日」の 5月13日という日は巻3の最後にも「五 天だん 承 元年は 1131年、 平安時代だ。

戻された年にあたる。 居していた藤原忠実が鳥羽上皇に呼び 天承元年を調べてみると、 宇治に蟄

したとも考えられる。 えた竹が根付き育つ如く、 号と日付を敢えて使ったのか。植え替 のものとは考えにくいが、 を伝授する意味で花伝書相伝の日付と 常識的には花伝書の内容が平安時代 なぜこの年 挿花の極意

「五月十三日 竹」以外にも「菊ばかり

の花伝書には無い内容があり興味深い。 立てず」と書かれていることなど、他

2, 「花の書」 玉津島明神_ 「紀貫之」「宇治の宝蔵

げき、 時、 天承元年五月十三日卯の刻なり。 を賜るなり。これをたづぬるに、 ころに人形にあらわれて彼巻物 せとありければ、 になり、 宝蔵に込めたまうより花の書絶 わが朝におい 夢想に玉津嶋の明神へ祈申むそう たまつしま みょうじん 宇治に三年お籠候て祈のいのり 近来紀貫能この事をな て、 則ち籠給うと 花の書字治 0)

三月三日枕丹丹音品種

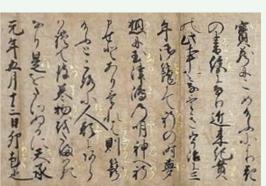
立情を入事

五月三月竹七月首提

月九日》

るもののことが書かれている。 巻3に右の文章があり「花の書」 な

関係は能の「蟻通」の中でも語られる。 を題材に能の の帰途に和泉国の蟻通明神で詠んだ歌 ことが「貫之集」からうかがえる。そ 神様であり、貫之も参詣したであろう 紀の国・和歌浦の玉津島明神は和歌の 紀貫之の書いた「土佐日記」は和語 紀貫之 (872~945) と玉津島明神の 蟻通」 がつくられた。



『文阿弥花伝書・鹿王院蔵』巻3の部分。⑥花の書について、⑥五節の花 に五月十三日竹とある。 『特別展いけばな歴史を彩る日本の美』(2009) より

古の「若の浦」もこんな景色だったのでは。

中の書物を管理する御書所預に任ぜまた彼は古今和歌集の編纂のあと、宮 りそうだ。 を見つけさせたのには、 られている。日本的なるものを生み出 した紀貫之に、 和文和字による日記文学の魁けである。 宇治の宝蔵で「花の書」 何か意味があ

法を記したものだろうか。 「花の書」とはいかなるものを指すの 古い時代の供花について、 その挿

玉 津 島 神 社

私も明神様から花道の極意を授かろう をご祭神とする。またの御名は丹生都上古より天照 大神の妹神である稚りない上古より天照 大神の妹神である神りない

尊をご祭神とする。

比売神である。 紀ノ川の河口に位置し、 潮の干満差が

衣通 姫 尊も祀られるようになってかられるようになる。歌に多く詠まれており、れるようになる。歌に多く詠まれており、 は和歌三神の一社として崇められてきた。 命名、又いつしか「和歌の浦」とも呼ば 呼ばれたが、聖武天皇によって明光浦と 神について、 いると聞く。 海面に玉のように浮かぶ島となったそう 大きく、満潮時には干潟に点在する山が 和歌山市には未知の古墳が多く眠って 周辺は美しく稚い浜辺「若の浦」と ますます興味が湧いてきた。 「花の書」ゆかりの玉津嶋明

玉津島神社の北西にある雑賀岬展望台に登った。

玉津島神社の紋。玉(宝珠)と菊だろうか。白 波を白菊と見る和歌がこの地で詠まれている。



季節の輝き

<12頁の花> 仙溪

岡虎の尾(桜草科)島瓜(瓜科) 衝羽根(白檀科)

陶花器

萎れるので撮影直前まで水に浸ず微笑んでしまう。葉はすぐに びきりのご馳走になった。 葉とツクバネを合わせると、と けておいた。オカトラノオの紅 さに季節の輝きだ。見ると思わ カラスウリの愛らしい実はま



かい場所をよく知っている。 レモンちゃん。太陽のあたる温

いけばな 桑原専慶流 2022年 12月号 No.714

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





実り

仙溪

には熟練の技がいる。砂糖で煮だけを剥き、渋皮を美しく残す栗の渋皮煮を頂戴した。鬼皮

るだけのシンプルな作り方だそ

うだが、飴色の見た目も美しく、

まなみに調べてみると植物学上では鬼皮が果肉で、渋皮は種上では鬼皮が果肉で、渋皮は種皮、その内側が種子にあたるので、種を食べていることになる。他にもイチゴは花托がふくらんだもので、表面のつぶつぶが果実にあたるそうだ。一つの花にめしべが百以上あるためにそうなる。

けて実りを味わっている。
見て食べることに加えて、いの姿はそれぞれに美しい。
見て食べることに加えて、いがが、種子を宿した「実り」がが、種子を強した「実り」が、

<2頁の花> 櫻子ロウヤガキ ロウアガキ

手付き木通籠

な実の柿で、黒く熟すため鴉のロウヤガキは中国原産の小さ



と書かれることもある。と呼ばれるようになり、老爺柿と呼ばれるようになり、老爺柿字がつく。読みはロウアガキな



コガネシダ

花器 燻し赤花器

季節の実と花を覗かせた。 だろうか。優しい色の繁みからいる。黄金色というより、曙色 とごとビニールで包んでいけて 土ごとビニールで包んでいけて





2種の実

<4頁の花>

仙溪

神檀の実(栴檀科) 七竈の実(薔薇科) 七竈の実(薔薇科)

金属花器

常緑のヒムロスギ。実たちが主 役のいけばな。 ナナカマドとセンダンの実と

柊

<5頁の花> 健一郎

陶花瓶

ミック*を受講して以来この音 である。去年の冬2人でリト the Halls はウェールズの民謡 スマス色になった。この Deck ディーが街を包み込み、クリ ららーと12月になるとこのメロ ひーいらぎ飾ろう、ふぁらら



ゲルマン人においてもキリスト 化ではセイヨウヒイラギを死と くなった。季節関係なく頭で流 楽が一年を通して頭から離れな たのだが先祖返りをしており、 なるらしく家の柊はそれであっ る。日本においても特別な木で 教においても特別な常緑樹であ 再生のシンボルとして崇拝され 中毒性とリトミックの楽しさが れ2人で口ずさむ。民謡独特の 木である。年を取ると葉は丸く ており、節分ではお馴染みの樹 うとされ庭に好まれて育てられ 古くから柊の鋭い棘は邪気を払 ており、意味合いは変われども ト誕生の数百年前、ケルトの文 合間ってのことだろう。キリス

り、艶のある葉、花の甘い香 る横枝。それぞれを味わい、そ 迷わず、生花を選択した。一種 り、魅力で溢れている。妻と愛 特別な木であるようだ。枝振 は喜ぶ。2人にとってなんだか い季節の花である。 の魅力を引き出そうとした。良 で堂々とした立ち枝と勢いのあ 求めた。取り合わせや様式では 柊をお花屋さんで見かけたので る。作例はたまたま花を付けた でる好きな木のうちの一つであ 家の庭の柊が咲くと、僕と妻



梅擬の生花

<6頁の花>

材 梅擬(黐の木科)型 生花 草型 副流し

日本いけばな芸術展出品作花器 銅薄端

和田慶千

梅擬除真立花

花材 梅擬 (黐の木科) ベア 除真立花 <7頁の花>

松(松科)
伊吹(檜科)
伊吹(檜科)
伊吹(檜科)
見返り草(紫蘇科)
大文字草2種(雪の下科)
杜鵑草(百合科)
寒菊(菊科)

桑原仙溪

になるかの見極めが肝心だ。引た枝のどこが生花の真、副、留た枝のどこが生花の真、副、留た枝のは滅多にいけられない。







健一郎先生が立てた立花 を一緒に拝見するレモン とメイ。

立花には梅擬の伸びやかな細さが生まれる。

面から立ち昇る生花特有の美しき締まった水際が作れれば、水

立花には権援の併びやかな細草花を取り合わせた。ぐるぐる草花を取り合わせた。ぐるぐると捻れた松をどう見せるかに悩んだが、様々な方向へ出た花材の調和が立花の見所であり醍醐味だ。多種の花材を調和させることができる立花という様式のスとができる立花という様式のないができる立花という様式のないができる立花という様式のないができる立花という様式のないができる立花という様式のが味を味わい尽くした先人は、会得した物を花伝書に残している。いけばなは今もその延長線上にある。

着な くのかは、 花 . を 見 て落 5

健 郎

だそれだけだった。家が近いと 投げたいと言う思いは日に日に られる場所、季節、自然に身を る必要は無いのだが、秋を感じ た秋でもあった。その時の自分 しれないという焦燥感と過ごし 感じる前に終わってしまうかも 日づつ過ぎ、いつの間にか秋を 気持ちが良い。その裏で日は一 お花を花屋で見て展覧会やデモ いう理由だけで、特に御所であ の願いは御所を散歩したい、た ンストレーションで生けるのは で目まぐるしい秋だった。秋の 華道家らしい花展とイベント

それは己の未熟さもあってだろ う。自然の中から帰ってきて初 方がその花とよく向き合える。 も草木といられるのは。切った のだろうか。自然の場にいずと 投げ、その余韻のようなものな めて自宅で花を生けられる気が ていない。自分は、自然に身を 花をいけるだけでは満たされ

> そうにも見える。 べる。そしてそれは今は実現し 来は幾何学的に合理的に設計さ 増えている。SFの書き出す未 工的な空間は驚くほどの勢いで れた超人工的な空間を思い浮か 目に見えるところ以外でも人

は人との状態もだが、自然との の状態を良い状態にするために りを求めるという概念で、心身 人間は本能的に自然とのつなが めている。バイオフィリアとは、 の建物を作ろうとし今注目を集 えが出せるよう精度を上げるた る。そして少しでも正確な答 測出来ないことが日常的に起こ CEO の感覚であるそうだ。予 らないらしく、最終的な決定は も20年後の正解であるかは分か 的には結果を得ることができて 測する会社でその判断が、短期 端の AI で最適化し、未来を予 いるらしい。Amazon は最先 物趣味の建物を作ろうとして カの Amazon という会社が植 くつか思い浮かぶが、アメリ SFAmazon はバイオフィリア の世界のような企業は

> じる。 るというのは自然な流れだと感 工物で溢れ自然の物がなくなっ て風景画は、身の周りから風景 た場所において自然が求められ がなくなってからおこった。人

う考え方である。 絵画史におい

の人は木の枝、灯台躑躅などをビジネスマンの人の中にも一部 だろうか。植物を楽しむ人が増 自動車道の街路樹といったグ とができるのだという。ビルや 豊かな自分があってこそ他のこ 飾る人がいる。そしてその中で るところは自分の感覚である。 えるのは喜ばしいことである。 計を求める流れになっていくの うつろいを感じさせる自然の設 リーンではなく、四季と人生の ことが起因しているとのこと。 事や家にいる時間が長くなった まっているらしい。在宅での仕 も最近は観葉植物に注目が集 ている。経営をする人の中にも イオフィリアの効果が期待され それを研ぎ澄まさせるためにバ IJ か、AI化に進むも、つま

活していた時間より、 人がいまのビルに囲まれて生 緑の中で

関わりが必要不可欠であると言

建物を創る前までは、 る。そのため落ち着くのだろう 安全で敵がいなかったためであ 生活していた時間の方が長い。 緑の中が

らつらと書いていく。 か。自分なりに感じたことをつ なぜ人は花を見て落ち着くの

前のことについてよく考える。 捉えて良さそうだ。それより以 関係を示したものとして有名で て特別な気持ちを持っていたと あるが、このときには花に対し れた。花と人間の魂、霊魂との の生命と花が初めて結び付けら た。ネアンデルタール人。人間 スカリであろう花粉が見つかっ 10 万年前の墓穴の一つからム

の花があったのではないかと考 木の実を予兆させるものとして まず人以前の話から考える。

森の中へ虫を求めて入ってい の祖先は虫食い。サルの祖先は 蟻とかミミズを食べていた。猿 た。モグラやヒミズの仲間で、 猿は食虫類から進化してき

猿はやがて、果物を食べるよう いった。 逃げ足の早い甲虫や蛾を食べる 虫食いも一括りにはできない。 き、 べる種類の身体が大きくなって た結果である。負けて果物を食 に負け、新しい食生を探し続け このことであろうか。生存競争 トとなった。負けるが勝ちとは ンウータンや、ニホンザルの 質を含有している。よってオラ た。葉は果物の2倍のタンパク は葉っぱを食べることになっ になり、さらに追いやられた猿 た。追いやられた甲虫を食べる 虫を食べられる下層部を占拠し 猿に別れた。そして強い種が幼 ように大型化し、肉を食べるヒ 幼虫を捕まえるのが得意な 虫食いの生活をしていた。

に違いない。 ものに本能的に反射で捕まえて そうでない種に比べ有利だった ができるらしいと発見した種は きるのか。どうやら花の後に実 実がなるのか。その実はいつで 虫を食べる種に比べ、どこにど は頭を使うようになった。動く んな木があり、どの季節にその そして果物や葉を食べる種類 その頃から、

上昇したのだろうか。 している。記憶力、認知能力が いを持っていたのだろうと推測

状態や葉の状態、植物に強い関

供と話している時間は豊かで多 係がありそうだ。理屈なしに花 と向き合う、 ちゃんや小動物に対して、食べ られますか?」と実物はもちろ 花に対して「美味しそう。食べ くの発見がある。 く気持ちという意味では何か関 いうのも綺麗なものに対して抱 てしまいたいくらい可愛い。と る。葉に対してはまだない。赤 ん花に対しても多くの質問があ 体験をしている人はお稽古のお よくお弟子さんや、 没頭した大人や子 いけばな

鳥類も虫や、果実が主で葉っい。猿はライバルが多く、葉っい。猿はライバルが多く、葉っぱを食べるしかなかった。だがぱを食べるしかなかった。だがぱを食べるしかなかったので、食べられないようにするために毒のあるものが多い。そこで猿は恐る恐るのが多い。そこで猿は恐る恐るのが多い。そこで猿は恐る恐るやまみ食いをする。一つの毒を中させない毒の分散である。マハレというタンザニアのチンマハレというタンザニアのチン

パンジーは、360種くらいの食物メニューを持っている。日本物メニューを持っている。日本食べるそうだ。我々も色々と食食べるそうだ。我々も色々と食かないほどである。猿は毒のもわないほどである。猿は毒のものを見つけると、学習し、それを子供に伝えるのだが、私はそれを文化の芽生えであると考えれるでいる。

表れぞれの場でそれぞれの種 自分の生活が少しずつ発展し今の 自分の生活があるという認識を 持っている。虫を食べていた頃 た此べて自分の今の生活が優れ ているのかと問われれば、不思

ある。 いる。 的の場合は最高である。 着かないが、 の音を2人で聞くのが楽しみで ても心地がいい。読書や作業が られない。虚だとはわかってい 分では思っているのだが、 は録音された自然の音を聞いて を流し聴いているのだが、 夕食後妻の菜月と部屋で音楽 クラシックは荘厳で落ち 雨の日は何もかけずに雨 なんて滑稽なことだと自 音楽を聴く事が目 ジャズ やめ

は心地いい音が会話に弾みをつける。聞こえていても意識せず、そっとそばにある音を最近は好んでいる。菜月と昨日も鴨川を歩いてきた。他愛もない話をしながら空気を吸う時間がかけがえなく心地良い。結局なぜ落ち着くかは、分からない。



新世代いけばな展 11/4~6 立誠ガーデン・ヒューリック京都

(2)



いけばなインターナショナル神戸 11 月例会 11/11 神戸倶楽部

蝦夷松の立花

上野淳泉

桑原健一郎

蝦夷松(松科) 表紙の花>

(椿科)

鎌ょった 乱れ菊2種(菊科) 柄(薔薇科)(檜科)

花器

陶花器(清水六兵衛作)

日本いけばな芸術展出品作

最高のお花を最高の器で最高 山本慶智 杉浦慶弥 大野慶友

だった。 のを感じた。気持ちいい山歩き た。この立花が出来上がった時、 ぞかせる。毎朝の水替え、手直 をのぞかせ、様々な花が顔をの た。蝦夷松を主に蝦夷竜胆が顔 の1人として立花を立てまし の人達と生け込み。五人席の内 下山をした時の満足感に近いも しも楽しく良い状態をご覧頂け

健 郎

> \neg ホッホチャンとケンチャン』 仙齋彩歳』と をネットでいつでも

のメッセージが詰まっていま ホッホチャンとケンチャ 父の「仙齋彩歳」と母の この12月で父が亡くなり この2冊の本には両親

> 冊の内容もいつでも誰でも見 られるように公開することに 10年となる節目に、これら2 しました。

ただければ幸いです。 で両親の言葉に再び触れてい ただき、スマートフォンなど ふとした時に思い出してい 仙溪

ほかをご覧いただけます。 ケンチャン』『テキスト50年分。

https://www. kuwaharasenkei.net



10

『仙齋彩歳』『ホッホチャンと



枯れヒマワリ

芭蕉の枯葉(芭蕉科) 枯れ向日葵3種(菊科) <12頁の花>

木苺(薔薇科)

日本いけばな芸術展出品作 横田慶重 川瀬慶裕 陶花器 (近藤豊作) 米山慶嘉

ど、無数の実りが詰まったその 木までされている。 種が欠けてしまわぬように大切 さを知っている栽培家によって 顔は艶やかで美しい。その美し に梱包され、乾いた茎には添え 枯れヒマワリと呼ばれるけれ

を立て終えていた。 が丁寧に紐で絞られていた。気で、束を懈くと数百箇所の小枝 のだろうと想像しながらいけて 老桜をどれほど大切にしていた の遠くなるような作業だ。この がいけた桜はとても大きな枝 いたら、いつのまにか桜の立花 そういえば、3月の流展で私

思いはより深くなる。いけばな が、そこには多くの人の思いが は外見的には花と器の世界だ 加わっているのだ。 ことを思うことで、その花への いける花を届けてくれた人の

